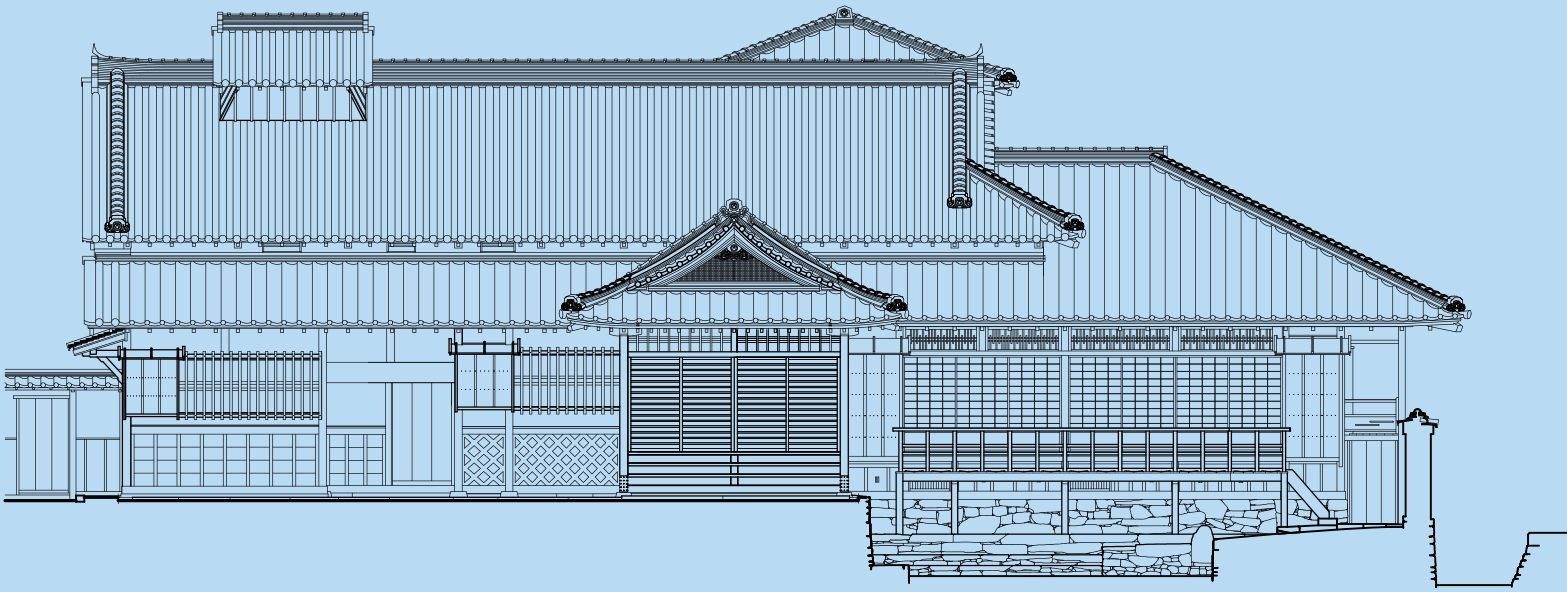
財団法人

和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と 文化財建造物保存修理の記録

2009



埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理　2009

1　古墳時代の勾玉　出土状況　南から　坂田遺跡

2　弥生時代の溝　遺物出土状況　北から　神前遺跡

3　古代の瓦溜まり　遺物出土状況　北から　北山廃寺、北山三嶋遺跡

4　鎌倉～室町時代初頭の瓦組井戸　北東から　秋月遺跡

5　旧中筋家住宅　竣工した主屋を東より見る

6　旧中筋家住宅　主屋オモテザシキ　唐花立涌柄の唐紙

7　金剛三昧院客殿及び台所　上段の間西広縁（組立途中・当初の姿）

8　鈴木家住宅　茅葺き屋根の葺き替え

目　次

平成21(2009)年度　受託事業一覧 …… 2
平成21(2009)年度　受託事業所在地図 …… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理

重行遺跡の発掘調査…… 4
中飯降遺跡、加陀寺前経塚の発掘調査…… 6
神前遺跡の発掘調査…… 7
坂田遺跡の発掘調査…… 8
北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査……10
粉河寺遺跡の発掘調査……12
百合山古墳群の発掘調査……13
秋月遺跡の発掘調査……14
神野々Ⅰ遺跡の発掘調査……16
特別史跡
　岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理……17
県指定史跡水軒堤防の発掘調査……18
八丁田圃遺跡の発掘調査……19
西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡の出土遺物整理……20
田辺城下町遺跡の出土遺物整理……20
野田地区遺跡の出土遺物整理……21
埋蔵文化財関連整理業務……21

文化財建造物の設計監理・保存修理

重要文化財 旧中筋家住宅の保存修理 ……22
旧中筋家住宅内塀・通用門の復元……24
重要文化財
　金剛三昧院客殿及び台所ほか１基の保存修理……25
重要文化財 鈴木家住宅の保存修理 ……27
県指定文化財 旧小早川梅吉氏宅の保存修理 ……27

関連研究・資料紹介

丁ノ町・妙寺遺跡出土の石錘……28
秋月遺跡の瓦組井戸……32
金剛三昧院台所における竈の復原考察……34
唐花立涌の襖について……37

普及活動

平成21年度の普及活動 ……39

センター概要

平成 21(2009) 年度概要 ……43

巻 頭 写 真

1　古墳時代の勾玉　出土状況 南から　坂田遺跡
2　弥生時代の溝　遺物出土状況 北から　神前遺跡
3　古代の瓦溜まり　遺物出土状況 北から　北山廃寺、北山三嶋遺跡
4　鎌倉～室町時代初頭の瓦組井戸 北東から　秋月遺跡
5　旧中筋家住宅　竣工した主屋を東より見る
6　旧中筋家住宅　主屋オモテザシキ　唐花立涌柄の唐紙
7　金剛三昧院客殿及び台所　上段の間西広縁（組立途中・当初の姿）
8　鈴木家住宅　茅葺き屋根の葺き替え

例　言

1　本書は、財団法人和歌山県文化財センターが平成 21 年度受託事業として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理業務、文化財建造物の保存修理設計監理業務、および普及活動の成果をまとめたものである。

2　掲載した地図は、和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』2004 ～ 2006 年度（地図は国土地理院発行の数値地図 1:25,000 の複製）、および数値地図 1:25,000 の複製を一部加筆し引用した。また各自治体の発行する 1:2,500 都市計画基図を一部加筆し引用したほか、電子国土（http://cyberjapan.jp/）提供図の複製を用いた。

3　掲載写真・図面は、基本的に調査および整理中に撮影・作成したものであり、出典が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業中のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。

4　掲載した座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。

5　原稿執筆は職員が分担して行い、文末に執筆者名を記した。編集および概要原稿作成は、岩井顕彦・御船達雄が担当した。

平成 21(2009) 年度　財団法人和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理業務

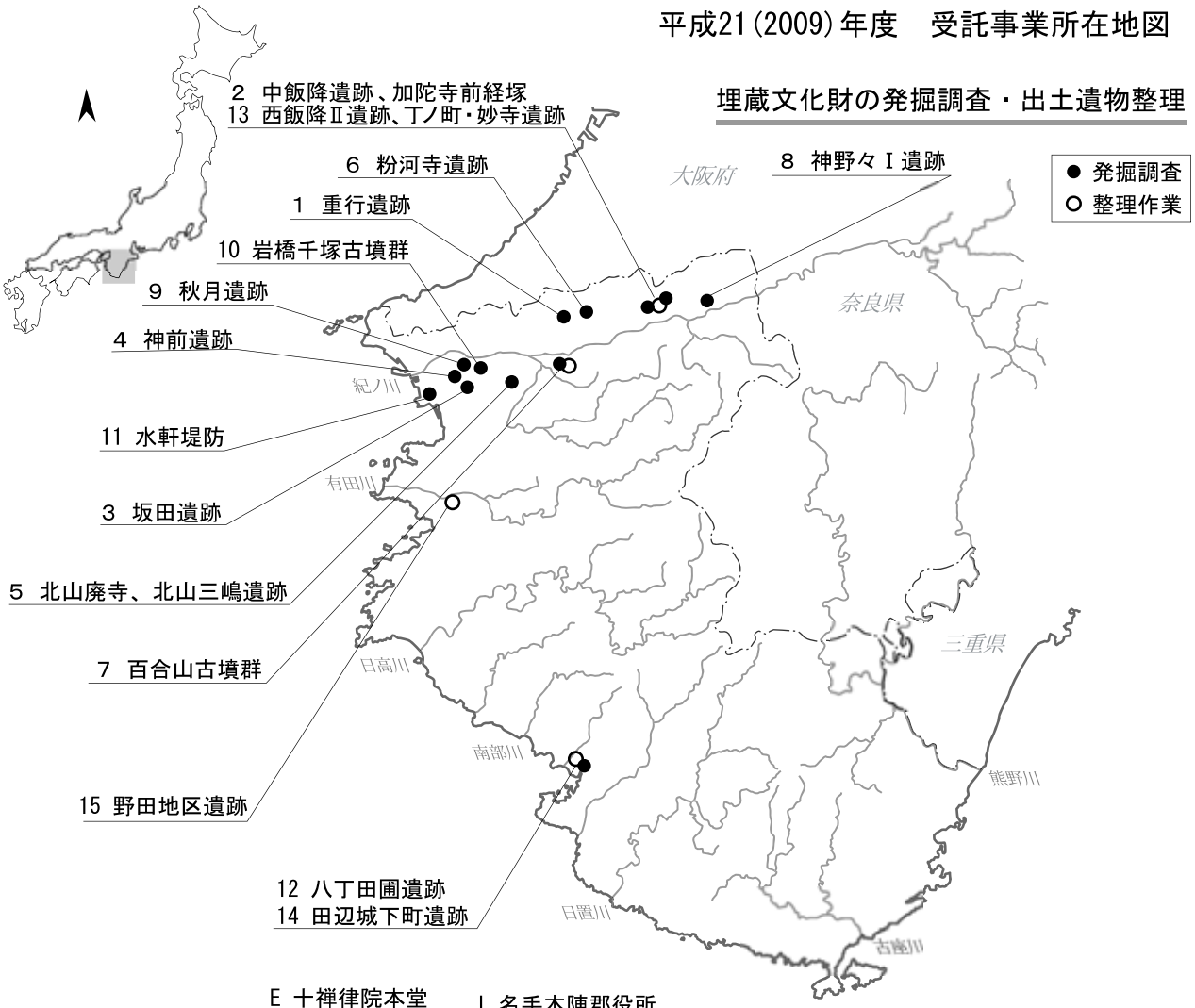
	受託業務の名称	所在地	実施期間	調査面積	委託機関等
1	一般国道 24 号京奈和自動車道 遺跡（重行）発掘調査業務	紀の川市重行	2009.04.21 ～ 2009.10.15	10,103㎡	国土交通省 近畿地方整備局
2	一般国道 24 号京奈和自動車道 遺跡（中飯降・加陀寺前経塚）発掘調査業務	かつらぎ町 中飯降・大藪	2009.08.19 ～ 2010.02.28	363㎡	国土交通省 近畿地方整備局
3	三田三葛線道路改良工事に伴う坂田遺跡発掘調査業務	和歌山市坂田	2009.09.16 ～ 2010.03.25	1,947㎡	和歌山県 （海草振興局）
4	和歌山橋本線道路改良事業に伴う神前遺跡発掘調査業務	和歌山市神前	2009.09.30 ～ 2010.03.25	1,653㎡	和歌山県 （海草振興局）
5	中山間総合整備事業（北山地区）に伴う北山廃寺・北山三嶋遺跡発掘調査等業務	紀の川市 貴志川町	2009.05.12 ～ 2010.03.30	15,324㎡	和歌山県 （那賀振興局）
6	長屋川通常砂防工事に伴う粉河寺遺跡発掘調査業務	紀の川市粉河	2009.03.13 ～ 2010.01.29	340㎡	和歌山県 （那賀振興局）
7	県営畑地帯総合整備事業（安楽川地区）に伴う百合山古墳群発掘調査等業務	紀の川市 竹房、桃山町	2009.07.23 ～ 2010.01.15	408㎡	和歌山県 （那賀振興局）
8	山田岸上線道路改良調査（神野々Ⅰ遺跡発掘調査）業務	橋本市神野々	2009.09.30 ～ 2010.07.15	280㎡	和歌山県 （伊都振興局）
9	向陽高校体育館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 （秋月遺跡発掘調査）	和歌山市太田	2009.05.19 ～ 2009.11.30	1,696㎡	和歌山県 （教育委員会）
10	発掘調査等支援業務（特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業に伴う発掘調査・出土遺物整理）	和歌山市岩橋	2009.10.28 ～ 2010.03.25	30㎡	和歌山県 （教育委員会）
11	和歌山下津港 港湾改良発掘調査外合併業務 （水軒堤防発掘調査 道路 - ２）	和歌山市西浜	2009.10.01 ～ 2010.03.25	900㎡	和歌山県 （下津港湾事務所）
12	近畿自動車道紀勢線事業に伴う八丁田圃遺跡発掘調査業務	田辺市秋津町	2010.01.30 ～ 2010.03.25	142㎡	国土交通省 近畿地方整備局
13	一般国道 24 号京奈和自動車道 出土遺物整理業務 （西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡出土遺物等整理）	かつらぎ町 丁ノ町・妙寺	2009.04.16 ～ 2010.03.31	—	国土交通省 近畿地方整備局
14	元町新庄線道路改良調査（田辺城下町遺跡出土遺物等整理）業務	田辺市 南新町・湊	2009.10.27 ～ 2010.06.10	—	和歌山県 （西牟婁振興局）
15	高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設事業に伴う埋蔵文化財出土遺物等整理作業（野田地区遺跡出土遺物等整理）	有田川町 野田・天満	2009.03.02 ～ 2009.10.31	—	西日本高速道路株式会社
16	平成 21 年度和歌山県緊急雇用創出事業臨時特例基金活用事業に係る埋蔵文化財関連整理に関する業務（埋蔵文化財関連整理業務）	和歌山市岩橋 日高川町土生	2009.12.29 ～ 2010.03.26	—	和歌山県 （教育委員会）

文化財建造物の設計監理業務等

	受託業務の名称		所在地	実施期間	棟数	委託機関等
A	重要文化財	旧中筋家住宅保存修理設計監理業務	和歌山市禰宜	2009.04.01 ～ 2010.03.31	６棟	和歌山市
B	重要文化財	旧中筋家住宅保存修理業務	和歌山市禰宜	2009.04.01 ～ 2010.03.31	６棟	和歌山市
C	重要文化財	金剛三昧院客殿及び台所ほか１基保存修理設計監理業務	伊都郡 高野町高野山	2009.04.01 ～ 2010.03.31	１棟・１基	財団法人 高野山文化財保存会
D	重要文化財	鈴木家住宅保存修理設計監理業務	有田郡 有田川町中峯	2009.04.01 ～ 2009.09.30	１棟	鈴木良子
E	県指定文化財	十禅律院本堂ほか保存修理設計監理業務	紀の川市粉河	2010.01.15 ～ 2010.03.31	３棟	宗教法人 十禅院
F	重要文化財	紀伊風土記の丘民家等修繕設計監理業務	和歌山市岩橋	2009.05.22 ～ 2010.02.28	１棟	和歌山県 （教育委員会）
G	県指定文化財	慈尊院多宝塔保存修理に伴う技術指導業務	伊都郡九度山町慈尊院	2009.10.01 ～ 2010.03.31	１棟	宗教法人 慈尊院
H	国史跡	高野山金剛峯寺伽藍中門復元実施計画業務	伊都郡 高野町高野山	2009.10.01 ～ 2010.03.31	１棟	宗教法人 金剛峯寺
I	国史跡	名手本陣郡役所部材調査業務	紀の川市 名手市場	2009.06.10 ～ 2009.06.30	２棟	紀の川市
J	伝統的建造物群保存地区	湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区保存修理技術指導業務	有田郡 湯浅町湯浅	2009.06.02 ～ 2010.03.31	—	湯浅町
K	未指定	旧中筋家住宅保存修理事業に係る内塀・通用門等復元業務	和歌山市禰宜	2009.06.29 ～ 2009.11.30	２棟	和歌山市

平成21(2009)年度　受託事業所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理



文化財建造物の保存修理・調査

重行遺跡の発掘調査

遺跡の時代：室町時代、江戸時代
所　在　地：紀の川市重行
調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）改築
調 査 機 関：2009.04 ～ 2009.10
調査コード：09-06・48

調査の概要

本遺跡は昨年度と本年度の２ヵ年にわたり調査を実施した。昨年度の調査は県道打田・泉佐野線の東側と西側を調査し、西側の最も高いところで弥生時代中期の竪穴住居を検出した。また、調査地全体に渡り室町時代の屋敷地と考えられる敷地を区画する石垣や、この屋敷地に関係すると思われる多数の柱穴や地鎮坑、掘込み地業などを検出した。

本年度は昨年度調査地の西側を 10,103㎡調査した。調査地の現況は水田や宅地跡となっていた。

地形は西から東へ雛壇状に三段となり、また逆に東から西に二段の段がつく。つまり、調査地の中央が最も低く、この低い箇所が調査地の北から南西方向に向って延びる谷筋にあたる。調査地全体の遺構検出面の標高は約 108.4 m～ 99.5 mの範疇で、かなりの比高差がつく。

調査地の地区名は昨年度調査の続きとしてＥ～Ｇ区とし、西側の丘陵部分をＥ区、低地部分と微高地部分をＦ区・Ｇ区とした。さらに地区呼称の補足として、調査地全体に現有水路が巡っていたため、水田区画毎に枝番を与え小地区を設定した（例：Ｆ３区）。また、残土置場確保のため反転調査とし、北側を前半の調査、南側を後半の調査とした。

調査の成果

Ｅ区

調査地の中で最も標高の高い地区である。現況は水田となっていた。北側から続く和泉山麓の尾根上である。現在は広域農道橋本・岩出線によって南北に寸断されてはいるが、元々は北側の城山城跡と考えられている地点から地続きである。この地区の基本層序は第１層：現耕作土、第２層：現床土、第３層：整地土、第４層：中世包含層、第５層：地山である。第３層は地山を掘削して西から東に掻き出し整地を行っている状況が堆積状況で明らかに解った。近世の新田開発に伴うものであろうか。

検出した遺構は全て中世に帰属するものであった。それらには土坑状遺構、溝状遺構、掘立柱建物などがある。土坑状遺構の中でも、遺構 5085・5086 とした２基は形状や埋土の堆積状況、遺物の出土状況などから土壙墓と考えられるものである。この遺構 5085 の底からは青磁輪花皿が出土した。遺構 5086 からは土師器皿が３枚出土した。他に掘立柱建物を２棟検出し、この建物の東に隣接して直径約 40㎝の地鎮坑（遺構 5145）と考えられる遺構を検出した。この坑からは５枚の土師器皿が出土した。状況は底に土師器皿を正位で２枚重ね、その上に１枚で蓋をし、他の２枚は伏せた状態で壁に貼付いていた。

Ｆ区

Ｅ区の東側にあたり、谷状地形から徐々に微高地となる地区である。この地区で検出した遺構は中世と近

調査区遠景（航空写真）　南から

遺構 5085 青磁輪花皿出土状況　北から

世のものである。中世の遺構は土坑、溝、地鎮遺構、石積井戸、柱穴などであった。近世のものは石室（いしむろ）、土坑、石積井戸などを検出した。

この地区の最も低い箇所を北から南に流れる流路（遺構 6217）を検出し、これに昨年度Ｂ区で検出した流路（遺構 6133）が北東から南西方向に流れ、合流するという状況を確認した。これらの流路は出土遺物から中世まで機能していたと考えられる。遺構は流路の西側、東側の微高地上で検出し、中世における生活域はこの流路を挟んで展開されていたものと考えられる。また、流路の肩部に近い場所で石積井戸２基を検出した。これらの井戸は流路を挟んだ東側の敷地、西側の敷地に付随する井戸と考えられ、双方ともに流路に近い、敷地の最も低い位置の湧水好条件の地点に築かれていた。遺りの良かった東側の敷地の井戸（遺構 6126）について若干触れておく。掘形は円形で、直径約 1.6 mを測り、大きさ 15 ～ 40㎝程度の砂岩礫を積んでいた。石積みの内径は上部で 0.7 m、下部で 0.85 mとやや裾広がりの断面形状を呈する。残存の深さは約 1.9 mを測る。底には直径 50㎝程度の曲物を転用して井戸底としていた。また、曲物の上部を 60㎝ × 30㎝の緑泥片岩の板石が覆っていた。この状況から井戸廃棄時の儀式の一環と考えられるものである。出土遺物は底から瓦質土器の破片（羽釜・甕・火鉢）、土師器皿が出土した。また、この井戸の東側で柱穴や土坑状遺構を検出し、柱穴については建物を成すことができなかったが、柱穴間では地鎮坑と考えられる土師皿を６枚埋納した遺構を検出した。

近世の遺構は主に調査地の東端で検出した。確認した遺構は石室（いしむろ）状遺構２基、ゴミ穴として掘られた土坑状遺構などであった。石室状遺構の石積みの規模では、東西長 2.25 m、南北長 1.25 m以上を測り、北側は破壊されていた。石積みは 15 ～ 30㎝大の砂岩礫を使用し、３～４段分が遺存していた。床面は約３㎝の厚さに粘土が貼られていた。この石室からは肥前系陶磁器（波佐見焼・唐津焼）、近世瓦などが出土した。

まとめ

以上、重行遺跡で２ヵ年に渡り調査を行った結果、検出し得た遺構は大きく分けて、弥生時代中期、室町時代、江戸時代後期の３時期であった。これらの遺構は、後世の開発による削平が著しく、残存状況は良くなかった。本年度については弥生時代の遺構は確認できなかったが包含層から石鏃、サヌカイト剥片が出土していることから弥生時代の集落が展開されていたことが窺える。中世の遺構は全地区で検出した。昨年度調査で検出した屋敷地を画したであろうと考えられる石垣を検出し、出土遺物からも日常雑器に混ざって青磁碗・皿、白磁瓶子、瀬戸焼平碗・瓶子、漆椀などの一般集落では使用されないであろうと思われるものが出土している。中世の屋敷地の存在は出土遺物から 15 世紀初頭と考えられる。検出した近世の遺構の主たる時期は、その出土遺物から 18 世紀と考えられ、調査前は、この地に東勝寺という住民会館を兼ねた寺が存在し、今回検出した遺構は検出箇所が限られていることから、この寺の前身の可能性もある。

今後、本調査地周辺で調査の機会があれば、弥生時代の生活域あるいは、中世の屋敷地の広がりの解明が期待される。（佐伯和也）

遺構 6126 石積井戸断割り状況　南東から

中飯降遺跡、加陀寺前経塚の発掘調査

遺跡の時代：縄文時代、古代・近世
所　在　地：伊都郡かつらぎ町中飯降、大藪
調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）改築
調 査 機 関：2009.08 ～ 2010.02
調査コード：09-13・14、09-13・30

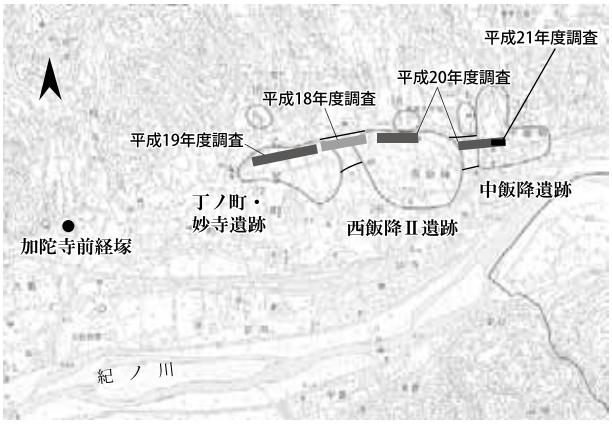
調査の概要

中飯降遺跡では平成 20 年度に同事業の第 3 次調査で縄文時代の大型竪穴建物跡 3 基が発見され、調査区外の現有町道下に広がることから、今回調査を行った。加陀寺前経塚は、道路予定地内にある石碑周辺が新たに埋蔵文化財と認められたため、調査の必要が生じた。

調査の成果

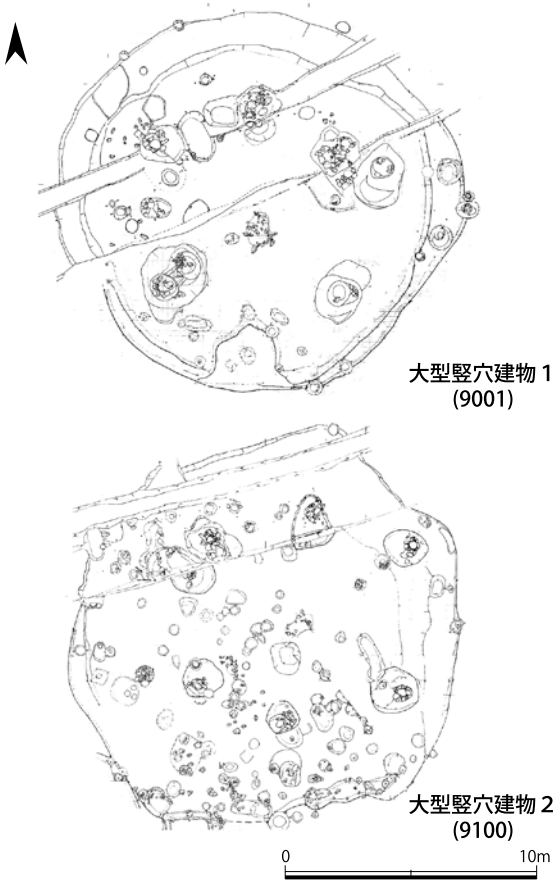
中飯降遺跡では、前年度調査の 9001 竪穴と 9100 竪穴の北半部分を検出し、床面で複数の柱穴を発見し 2 回ないし 3 回の柱の建替えがあることが判明した。また新たに 10050 竪穴を調査区西端で検出した。各竪穴内および竪穴周囲では、埋設土器、土坑、溝を検出した。

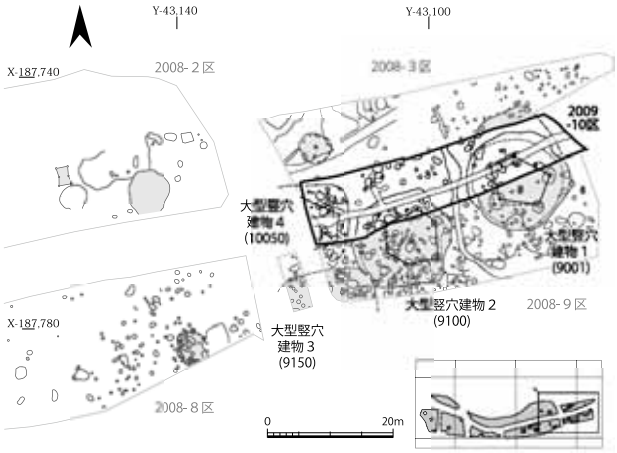
加陀寺前経塚は大藪集落の北東にあたり、「加陀寺山」と称し 16 世紀末まで寺院が存在したという伝承がある。西方には 12~13 世紀の大藪経塚が発見された慶勝寺がある。調査地には、「法華塚」と記された石碑が現存し、碑文には大藪村出身の高野山の僧が文政五年（1822）に再び埋経を行ったとある。調査では 12~13 世紀頃の中国製磁器の合子の蓋 1 点が撹乱から出土したが、経塚主体部は検出されず、削平されたとみられる。　（冨永里菜）



調査位置図　S=1:50,000

中飯降遺跡　大型竪穴建物１の柱穴（縄文時代）　南から





中飯降遺跡遺構図　(上)S=1:300　(下)S=1:1,200

神前遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～近世
所　在　地：和歌山市神前
調査の原因：和歌山橋本線道路改良事業
調 査 機 関：2009.09 ～ 2010. 03
調査コード：09-01・307

調査の概要

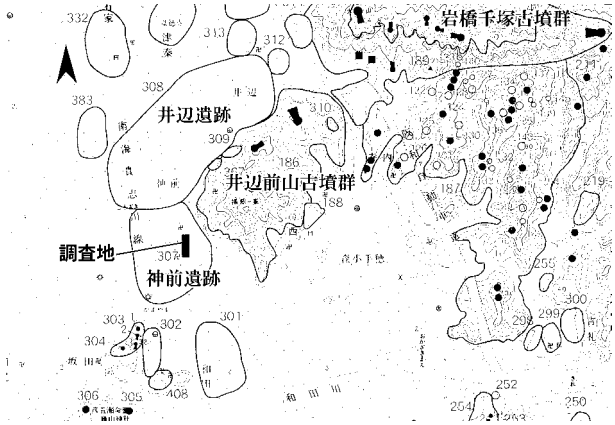
神前遺跡は和歌山平野南東部で、紀ノ川支流の和田川により形成された自然堤防状の微高地に立地する。北東の福飯ヶ峯には井辺前山古墳群があり、その西麓には古墳時代前期の集落跡である井辺遺跡がある。今回は道路予定地のうち、1,653㎡の発掘調査を行った。

調査の成果

１区　弥生時代前期の可能性がある南北方向の溝７条、土坑１基のほか、近世の可能性がある井戸２基、焼土坑１基、溝３条、柱穴などの遺構を検出した。弥生時代の出土遺物は少ない。

２区　弥生時代前期の土坑１基、前期～中期前葉の南北方向の溝５条、それに重複する後期の溝、井戸状遺構２基、土坑墓１基などがあり、それぞれ土器が多く出土し、南への遺構の展開を想定できる。中世では、鎌倉時代の区画溝とみられる東西溝２条がある。

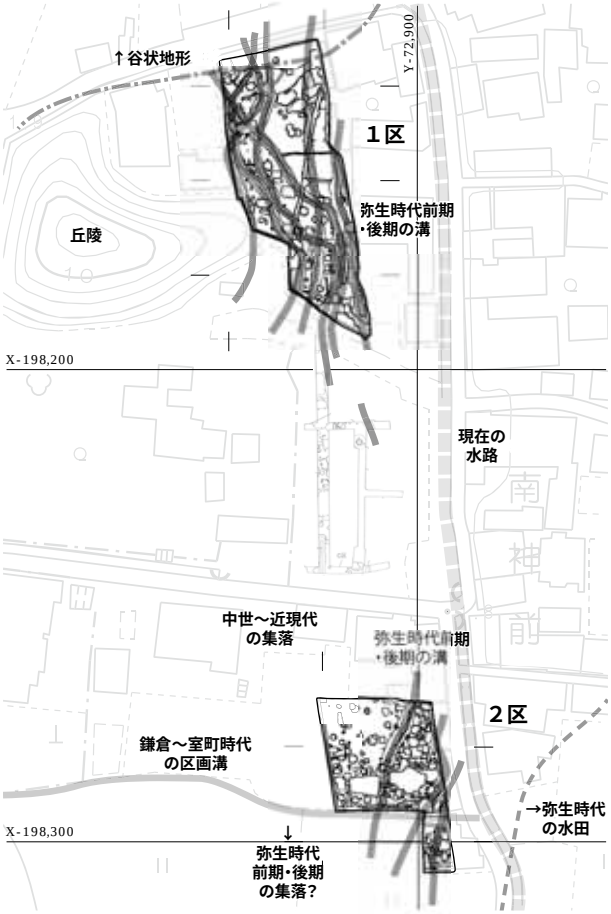
神前遺跡の弥生時代集落では、前期に溝が掘削され周辺が開発された後、中期前葉に廃絶し、後期に再び当地に集落が営まれると考える。中期中葉～後葉の生活痕跡はほとんどみられず、対照的に約３km北西に位置する太田・黒田遺跡では当該期に最盛期を迎える。また、鎌倉～室町時代の区画溝は現地割りと一致するため、神前集落の成立が中世まで遡る可能性を指摘できる。　（冨永里菜）



調査位置図　S=1:50,000

遠景　手前が２区　南西から

２区全景　北から



遺構図　S=1:1,600

坂田遺跡の発掘調査

遺跡の時代：古墳時代、平安時代、中世
所　在　地：和歌山市坂田
調査の原因：県道三田三葛線道路改良工事
調 査 機 関：2009.09 ～ 2010.03
調査コード：09-01・435

はじめに

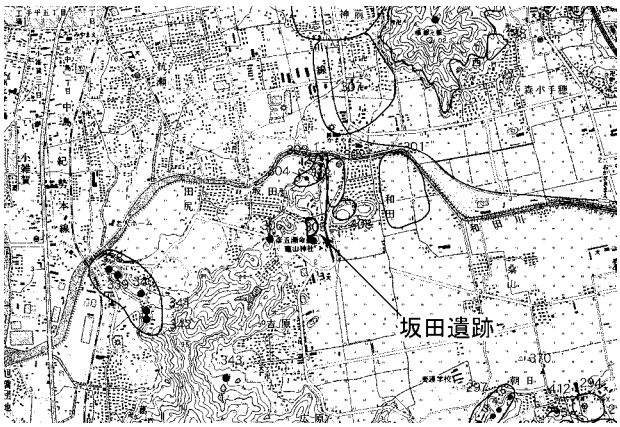
坂田遺跡は、神武天皇皇兄彦五瀬命竈山墓として宮内庁により陵墓に指定されている竈山神社古墳のすぐ北側に広がる遺跡である。今回の調査はその 1,947㎡の範囲にわたって実施された。

調査の成果

出土遺物からは古墳時代から中世にかけて集落の存在がうかがわれ、遺構は後世の削平や整地による影響を受けてはいたが、各時代の遺構面が部分的に残存していた。

調査区内の東半分は、現況においても微高地となっており中世、平安時代、古墳時代等の遺物包含層の下、標高 2.7m 前後で地山を確認した。西半分は西北方向に向かって下る比高差 1m 程度の緩やかな傾斜地となっている。またその先には広範囲に広がる粘土の堆積や南北方向に延びる流路の痕跡が確認できた。

このことから、近年に水田や宅地の一部として利用されていた当該地は、少なくとも近世頃までは、西側に広がる湿地帯を望む微高地という地形であったと考えられ、ここに営まれたと思われる集落はこの微高地の西端である当該調査区付近から東に展開していたものと推定される。



調査位置図　1:50,000

主な遺構

土坑状遺構（遺構 843）

長径 1.80m、短径 1.35m の楕円状の平面形を呈し、深さは現状で 1.10 mを測る。出土した須恵器坏、土師器碗等の遺物から、6 世紀頃の遺構と考えられる。

土坑状遺構（遺構 704）

東西 2.0m、現状で南北 1.40m の楕円状の平面形を呈し深さは現状で 1.60 mを測る。須恵器坏、土師器碗等の遺物から、6 世紀の遺構と考えられる。

遺構 704、843 はどちらも、その底を遺構検出面より 1m 以上も下にある砂層まで掘込んでおり、この砂層より湧水がみられること、更に土層の堆積状況から、井戸である可能性が指摘できる。底を砂層まで掘り込んでいる状況は石積み井戸（遺構 803）においても同様である。また、この２つの井戸は出土遺物の内容もよく似ている。

当該地付近における古墳時代の集落の存在はこれらの２つの井戸からも補強され、またこの集落と竈山神社古墳を含む周辺の和田古墳群、坂田地蔵山古墳群、三田古墳群との関わりも推定される。

石積み井戸（遺構 803）

直径約 1.0m の土坑の内側に大きさ 20 ～ 30㎝の結晶片岩を積上げた井戸である。石は底部から上端まで丁寧に積み上げられており、壁面の崩壊を防いでいる。出土遺物から中世の遺構であると考えられる。

また、他には平安時代と考えられる建物５棟の柱穴、中世の溝状遺構等を確認できた。

主な出土遺物

琴柱形石製品

遺構 003 の埋土上層より出土した。古墳時代（4 世紀末頃）の遺物である。

勾玉

勾玉は２個出土しているが、うち１つは土製の勾玉で、表面を覆っていたと思われる白色の土が部分的に残る。

土錘

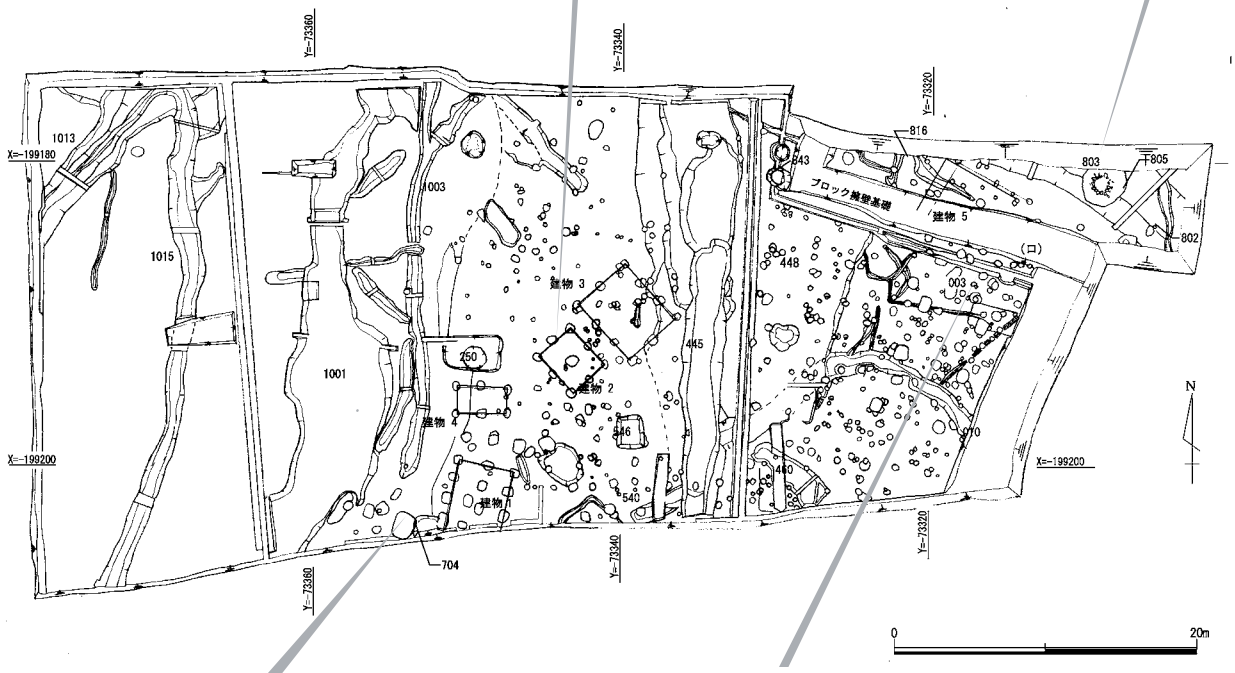
遺構 010（溝）の埋土から出土した。同時に出土した土器片から、古墳時代前期のものと考えられる。

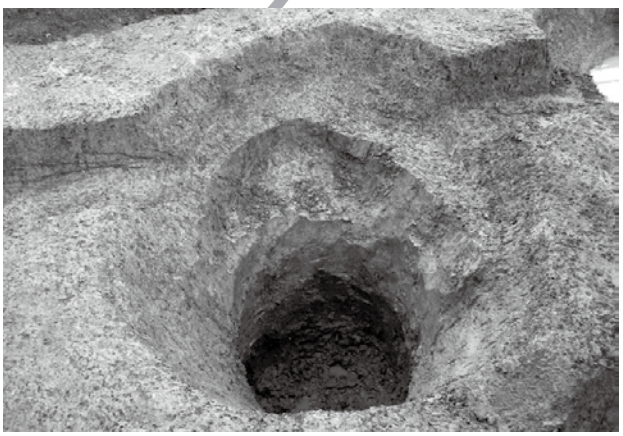
（寺西朗平）

建物 2（南から）

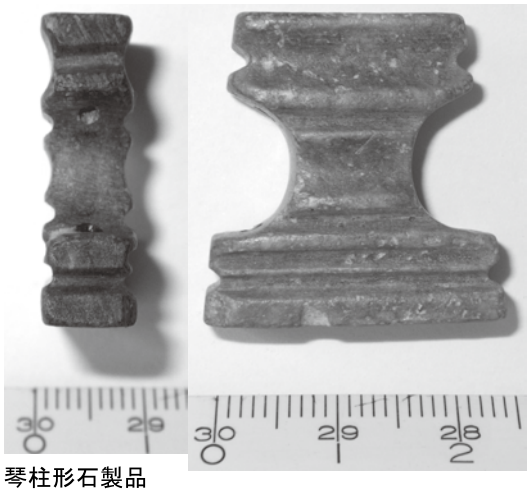
石積み井戸（遺構803　南東から）

坂田遺跡　遺構平面図





土坑状遺構（遺構843　西から）



琴柱形石製品

北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代、古代、中世
所　在　地：紀の川市貴志川町
調査の原因：中山間総合整備事業（北山地区）
調 査 機 関：2009.05 ～ 2010.03
調査コード：09-10･27･49

調査の経緯

本調査は、和歌山県（那賀振興局地域振興部農地課）の計画した中山間総合整備事業（北山地区）に起因する。昨年度に引き続き、和歌山県から委託を受け発掘調査等を実施した。

調査は当初、調査対象面積 13,816㎡を 4 調査区に分割して実施する予定だった。しかし、調査中に調査区の変更・追加があり、最終的には、調査面積 15,324㎡を 13 調査区に分割して実施した。

発掘調査の成果

弥生時代

昨年度の調査成果から、段丘の南端、今年度調査区の 8-1 区、8-2 区、９区等に竪穴建物が展開していると予測された。しかし、これらの調査区では、古代以降の地形改変が激しく、検出された遺構は、昨年度調査区の 2 区で検出された竪穴建物の延長部分のみであった。

7-3 区、8-1 区、8-2 区の遺物包含層や、5-1 区の古代の粘土採掘坑等から、遺物が出土している。このことから、該期の遺構は、後世に失われたと推定される。

古代

7-4 区の北側で、東西 5 間、南北 2 間の掘立柱建物が検出された。主軸は、座標北に対し、東 - 北へ 6 ～ 8 度、傾いている。掘形は隅丸方形で、規模は 0.5 ～ 0.8 mである。遺物としては、古代瓦片が数点出土している。規模や主軸の傾きから、寺院に伴う建物と考えてよかろう。ただし、瓦の出土が少ないことから、寺院の中枢にかかわる施設ではないだろう。

6-2 区、8-4 区では、旧貴志川町が実施した試掘調査で、「西限の溝」とされた溝（1901- 溝、2001- 溝）を検出した。溝の幅、深さとも、約 0.5 ～ 1 mと一定しない。

5-1 区、6-1 区、6-2 区北半では、粘土採掘坑を多数検出した。

8-4 区では、高温作業を行った炉跡とみられる、直径約 0.6m、深さ約 0.3 mの土坑（3869- 土坑）を検出した。土坑の肩の部分は激しく被熱し、赤褐色を呈しているが、底面は、ほとんど焼けていない。埋土には古代瓦および須恵器片少量、炭、焼土、スラグが多量に含まれる。周辺の土坑からは、炉壁片とみられる遺物も出土している。

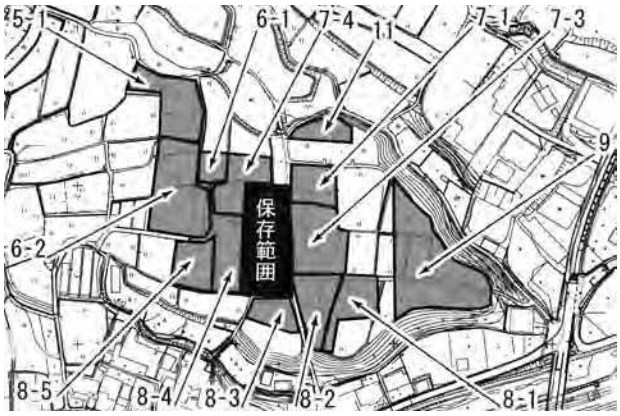
7-1 区をはじめとする、寺院中枢部より東側に位置する調査区では、後世の削平が激しく、8-1 区で検出された柱列以外、古代の遺構がほとんど確認できなかった。柱列は、南北方向に 2 列に並んでいるが、北側の 2 間分の柱間が 2.1 m前後なのに対し、南側の 4 間分の柱間は約 2.4 mと差がある。掘形は一辺 0.8 ～ 0.9 mの隅丸方形のものが多い。

中世

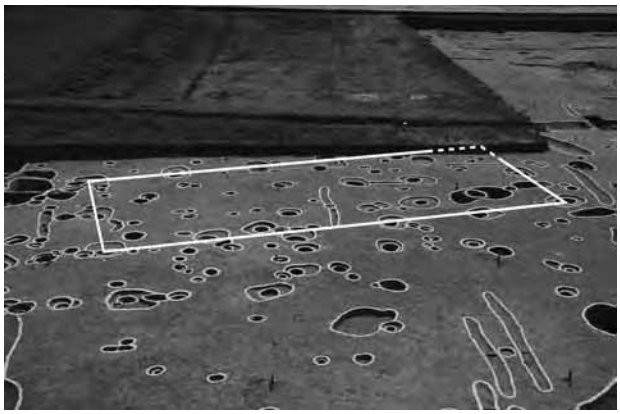
北山廃寺推定中枢部のほぼ中央から、東側と西側とで地山が礫質土とシルト質土と差があることを反映してか、遺構の性格・密度とも大きく異なる。

6-1 区、6-2 区北半の一段高くなった地点からは、粘土採掘坑が多数検出された。特に、6-1 区では繰り

調査位置図　S=1:25,000



調査区配置図　S=1:5,000



7-4 区 古代の掘立柱建物　北から

返し掘削が行われており、一部では土坑が連接して溝状になっている。

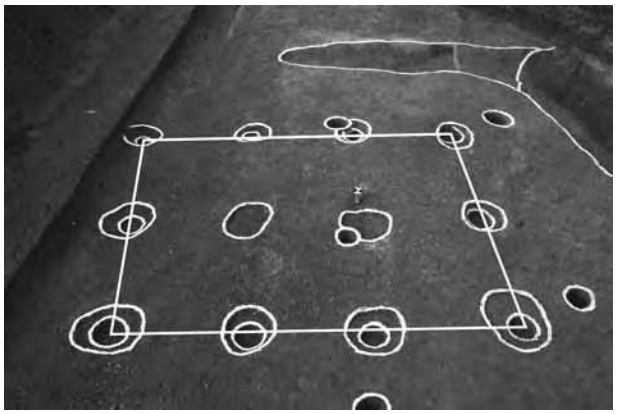
7-4 区の東半では、掘立柱建物を 3 棟確認した。柱穴の大きさや、礎板の有無など、構造に差がみられる。

8-1 区、8-2 区では、柱穴とみられる小穴が多数、検出されたが、柱間が通るものはほとんどない。また、土坑墓（1777- 墓）が 1 基検出された。南北約 1.2 m、東西 0.9 mの隅丸方形で、北西部の床面から土師器皿４枚と鉄製品が出土している。

8-5 区は、鋤溝や浅い素掘りの小溝のほか、土坑墓（3812- 墓）が 1 基検出された。長辺約 2 m、短辺約 0.8m の楕円形で、底面中央部には板石を敷き詰め、側壁には、石を立てている。板石および底面上には、厚さ約３㎝の細かく砕かれた炭層が広がっていた。丁寧な構造だが、副葬品は出土していない。

7-1 区、7-3 区など、北山廃寺推定中枢部の北東側は、土坑が散在する程度で、遺構密度は高くない。そうしたなか、11 区で、東西 2 間、南北 3 間の掘立柱建物が検出されている。掘形は隅丸方形、規模は 0.4 ～ 0.5 mである。遺物がほとんど出土しておらず、時期決定は難しいが、隣接している 7-4 区で検出された中世の

6-2 区 2001- 溝、8-5 区 1901- 溝　北から



11 区 中世の掘立柱建物　東から

掘立柱建物と主軸が同じであることから、おそらく、中世の所産であろう。

まとめ

２年間にわたる調査によって、北山廃寺、北山三嶋遺跡では、古代と中世以降の２度、大規模な土地の改変が行われていることを確認するなど、遺跡の変遷を、ほぼ確定することができた。また、地山の質の違いが、遺跡内の土地利用のあり方に大きな影響を及ぼしていることが明らかになるなど、大きな成果を得ることができた。　（岩井顕彦）

8-1 区 1777- 墓　東から

8-4 区 3812- 墓　北から

粉河寺遺跡の発掘調査

遺跡の時代：平安時代～江戸時代
所　在　地：紀の川市粉河
調査の原因：長屋川通常砂防工事
調 査 期 間：2009.03 ～ 2010.01
調査コード：09-07・22

遺跡の概要

粉河寺遺跡は、粉河寺の境内にほぼ重なって位置する。今回は、境内を流れる長屋川を改修する工事に先立って発掘調査を行った。調査地は、粉河寺中門の真南側になる。粉河寺そのものは、粉河観音宗の本山で西国三十三所観音巡礼の第三番札所として、また国宝絹本著色粉河寺縁起を有することで非常に有名な寺院である。

調査の概要

長屋川を改修する工事に先立つ調査では、平成18年度に引き続いて２回目となる。

今回の調査では、鎌倉時代から江戸時代にかけて連続した屋敷地と護岸石積などの生活の跡が幾重にも重なって見つかり、多くの成果を得ることができた。検出した主な遺構は、鎌倉時代の根固め石を伴った橋脚・水の勢いを制御する杭列、鎌倉・室町時代の各遺構面において石積護岸・石組溝、江戸時代の塀基礎・石積護岸・石組溝などがある。

また、多量の遺物が出土している。遺物の大半は、屋敷地側の整地土や昔の長屋川に堆積した土砂から出土した鎌倉時代から江戸時代にかけての様々な土器類と瓦類で占められる。その中で、特に興味をひくものに、数は少ないが古墳時代の須恵器、平安時代末の土師器・瓦、これらの遺物に混じって溶解炉の破片が数点出土している。

鎌倉時代の根固め石を伴った橋脚　南から

また、現在の地表面から約４ｍも下がった昔の長屋川に堆積した土砂の中から平安時代の遺物も出土している。

まとめ

以上のことから、今回の調査地には代々踏襲されてきた屋敷地の区画割が遺存していることが分かってきた。時代ごとに、屋敷地を広げるため護岸石積の位置が少しずつ現在の長屋川寄りに移動する変遷を辿ることができる。また、鎌倉時代の屋敷地に関係する建物跡や橋脚は、「粉河寺境内絵図写」（元禄８年：1695）・『紀伊国名所図会　第三篇　巻之一』（天保９年：1838）に描かれた長屋川に架けられた橋の位置・構造を探る上で格好の資料となる。　　（土井孝之）

調査位置図　S=1:25,000

江戸時代の塀基礎と石積護岸　西から

百合山古墳群の発掘調査

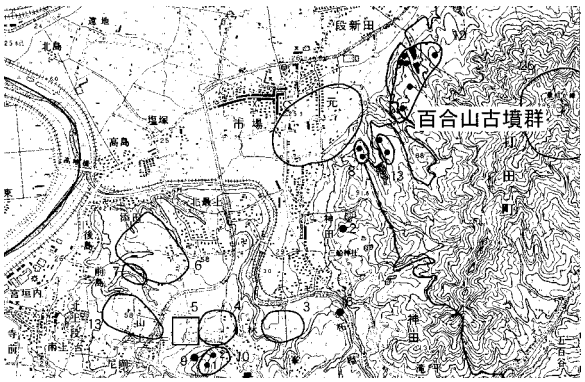
遺跡の時代：古墳時代
所　在　地：紀の川市桃山町・紀の川市竹房
調査の原因：県営畑地帯総合整備事業
調 査 機 関：2009.07 ～ 2010.01
調査コード：09-06・12

調査の経緯と遺跡の概要

和歌山県が、紀の川市域において産業の振興を図るため、安楽川地区１号水路兼用道路事業を計画したところ、当該地区は周知の埋蔵文化財包蔵地百合山古墳群に位置することが判明した。

このため和歌山県教育委員会が確認調査を実施し、その結果を受け、工事対象地内の３箇所において本発掘調査を実施した。

百合山古墳群は、紀の川市竹房及び同桃山町元に所在する。最初ヶ峰の西側に位置しており、舌状に張り出した丘陵となっている。調査地付近の標高は 67 ～ 75 mほどを測り、北および西側が開けており、紀ノ川と貴志川平野が一望できる位置に立地している。百合山古墳群については、埋蔵文化財包蔵地所在地図には６基のみ図示されているが、地元での伝承では「百合山の七つ塚」と呼ばれていたことが知られており、本来は７基の古墳が存在していた可能性も考えられる。このうち１号墳は昭和 11 年、２号墳は昭和 33 年に調査されており、出土遺物から両古墳とも６世紀中頃の築造と考えられている。



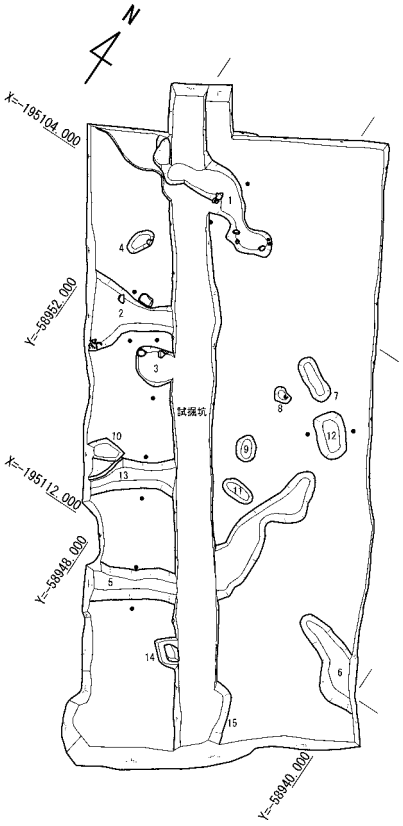
（打田地区）　12 百合山古墳群　13 観音山古墳群　26 最初ヶ峰城跡
（桃山地区）　1 元遺跡　2 神田古墳　5 最上廃寺　9 尼ヶ岡古墳
10 小林古墳　16 神田経塚
調査位置図　S=1：50,000

調査地から北西の平野部を望む

調査の成果

A 区とした調査区において幅 80 ～ 100㎝、深さ 40 ㎝ほどの溝を検出した。この溝は湾曲して弧状に延び、北側で途切れている。この途切れた先で２基の土坑を検出した。この土坑が溝の残欠部とすれば、これらはほぼ半円状につながるわけで、円墳の周溝部の可能性がある。

仮にこの溝が古墳の周溝の痕跡であったとすれば、直径 12 ～ 13 mの円墳が想定できる。記録の残っている百合山２号墳の墳丘規模は約 11 mであることから、規模的には充分にその可能性を考えることはできよう。主体部については、おそらく横穴式石室であったものと思われるが、遺物はもとより調査区内においてはその痕跡さえ確認することはできなかった。



A 区遺構平面図　S=1:200

しかしながら、この百合山古墳群は、紀ノ川中流域左岸に点在する古墳群の中でも横穴式石室の発達過程等を考える上で重要な古墳であり、今後も可能な限り調査の対象として追及していく必要があろう。

（村田　弘）

秋月遺跡の発掘調査

遺跡の時代：古墳時代～近世
所　在　地：和歌山市太田
調査の原因：向陽高校体育館建設
調 査 機 関：2009.05 ～ 2009. 11
調査コード：09-01・331

調査の概要

秋月遺跡は和歌山平野東部で、紀ノ川旧流路の一つであった出水川により形成された自然堤防状の微高地に立地する。北東に隣接して弥生時代の拠点的集落である太田・黒田遺跡があり、約１km 東には岩橋千塚古墳群が築かれた大日山の丘陵が存在する。また紀伊一宮とされる日前宮の南の平野部には条里地割がよく残り、古代より神領であったとされる。今回は向陽高等学校校舎建替に伴い 1,696㎡の発掘調査 (県関係Ⅷ次調査) を行なった。既往調査では県内最古相の古墳時代前期の前方後円墳や中期初頭の方墳５基が検出された。また中世日前宮の西に存在したという貞福寺に関わる遺構・遺物がある。

調査の成果

古墳時代　中期の方墳１基（古墳４）、後期の円墳３基（古墳１～３）がある。古墳４の北東には長方形土坑１基（307）と柱穴列がある。土坑からまとまって玉類が出土した。古墳はいずれも主体部は削平されて残存しないが、周辺の地形や周溝の状態から、高い墳丘が築かれたとは考えにくい。また石室の痕跡やまとまった石材も発見されなかったため、低墳丘で木棺直葬等の形式と推測する。

奈良時代　８世紀代の掘立柱建物４棟がある。

平安時代末～鎌倉時代　調査区中央で井戸１基（080）と、土坑１基（090）を検出した。また包含層等から当該期の瓦が多数出土した。

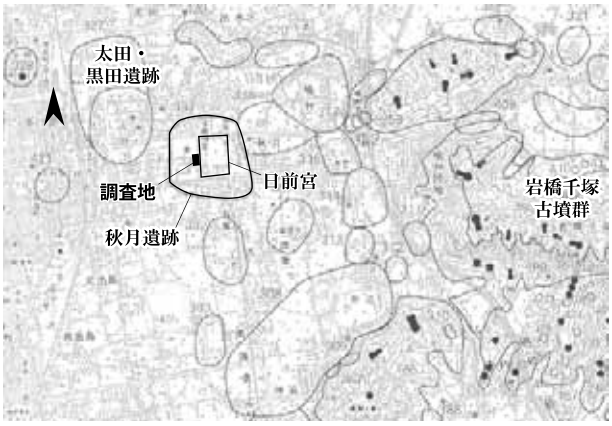
鎌倉時代末～室町時代　北半には、瓦組井戸１基 (075)、瓦溜まり２箇所 (093・217) と掘立柱建物の可能性がある柱穴群等がある。南半には、性格不明の大土坑 (001)、東西方向の大溝 (002)、大溝と並行する東西溝 (003)、瓦溜まり (004・024) 等がある。これらの遺構は瓦が多量に出土したことから貞福寺に関わる可能性があるが、伽藍や寺域に直接関わる遺構は検出していない。002 溝は、日前宮をはさんで東側の和歌山市９次調査でも、同時期、同規模の大溝が検出されているため、現日前宮社地を東西に横断する形で中世の大溝が存在した可能性がある。

まとめ

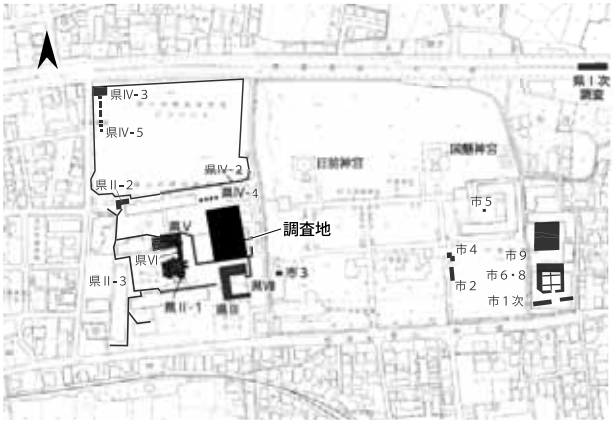
古墳時代は、既往調査とあわせ古墳 12 基となり、１km 東の丘陵上に立地する岩橋千塚古墳群との関係が注目できる。

平安時代末～鎌倉時代では、日前宮の東側に神宮寺、西側に貞福寺として、日前・国懸両神宮の本地仏を安置した寺院が古代末から存在したとされているが、貞福寺の伽藍は今次調査区内にはかからない。鎌倉時代末～室町時代初では、出土遺物から寺院の再整備が行われたと考えられる。大溝は日前宮領の土地開発にともなう用水路等の可能性がある。大土坑は大規模な土木事業の痕跡とみられる。一時的に溜水して池状となり、その後埋め立て整地される。

近世初頭に貞福寺は神宮寺に統合される。明治 37 年に海草農林学校、大正４年に海草中学校が創立され、戦後に向陽高等学校となる。　（冨永里菜）

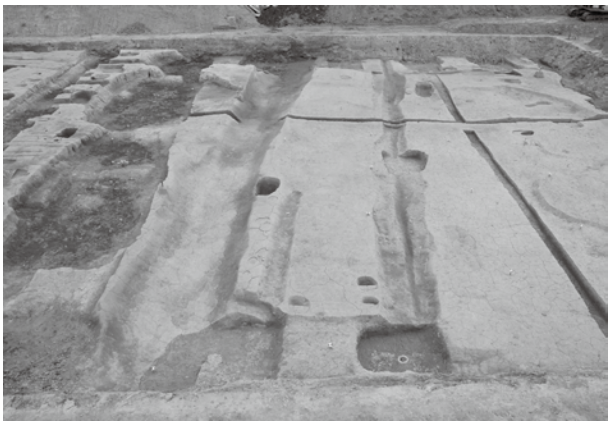


調査位置図　S=1:50,000



調査区配置図　S=1:8,000

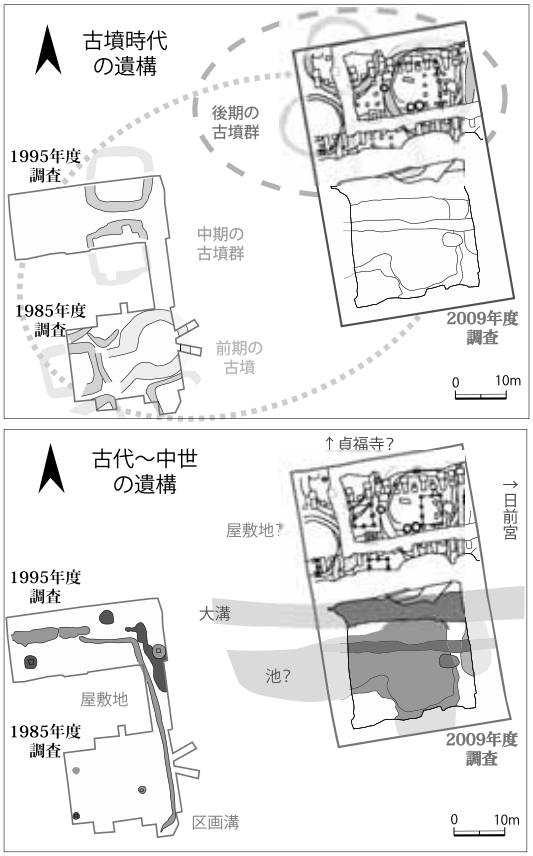
古墳群全景（古墳時代後期）　西から



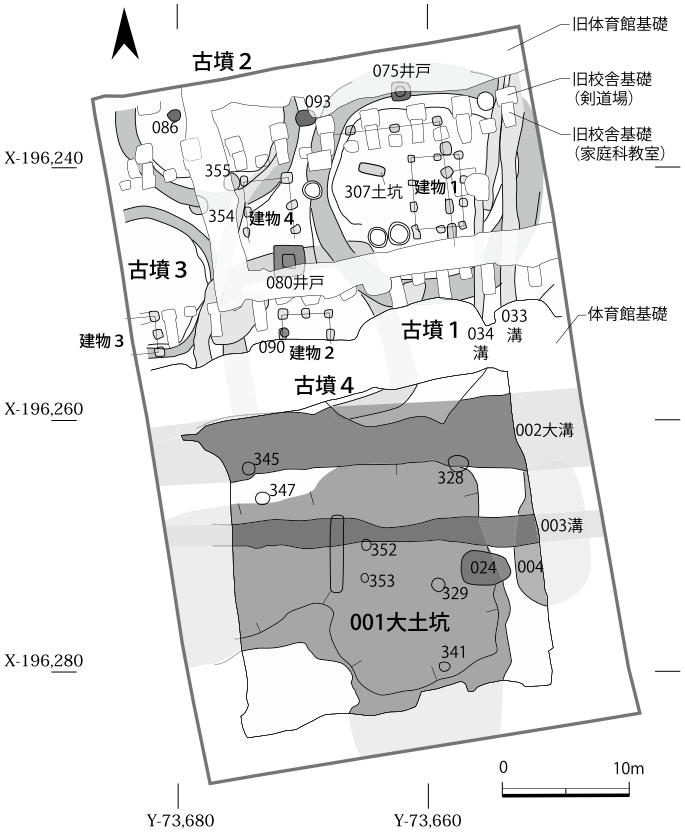
002 大溝（鎌倉 ~ 室町時代）　西から

古墳１出土土器（古墳時代後期）　南から

080 井戸（平安時代末）　南から



遺構変遷図　S=1:1,500



遺構図　S=1:600

神野々Ⅰ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：鎌倉・室町時代
所　在　地：橋本市神野々
調査の原因：県道山田岸上線道路改良工事
調 査 機 関：2009.09 ～ 2010.07
調査コード：09-12・55

遺跡の概要

本遺跡は従来から弥生時代～中世の遺物の散布地として周知されている。周辺の著名な遺跡としては、弥生時代では北東方向に方形周溝墓群を検出した柏原遺跡、西方向には搬入土器が多く確認されている名古曽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、奈良時代では南約 200m の地点に神野々廃寺跡が存在する。また、調査地の西側に展開する応其条里遺構の東端が本遺跡に及んでいたと考えられる。

調査地は、遺跡の北側に控える和泉山脈から派生する吉原川の開析によって形成された低位段丘と谷状地形から成る。

平成 19 年度に実施した第 1 次調査（1,300㎡）においては遺構密度が高く、弥生時代中期中葉の土坑、弥生時代後期後半～終末期の隅丸方形竪穴建物、奈良時代では長方形竪穴建物、平安時代末～鎌倉時代は掘立柱建物、柱列、土坑、区画溝、トイレと考えられるような施設などの多種多様な遺構を確認している。出土遺物についても弥生土器（壺・甕・高坏・鉢）、須恵器（壺・甕・杯身・杯蓋）、黒色土器、土師器（皿・甕・土釜・カマド）、瓦器（椀・皿・甕）、東播系捏ね鉢、瓦など、また、土器以外のものでは石製品（石鏃･敲石･砥石）､金属製品（鎌状鉄製品･鉄釘）､木製品（下駄･曲物･板材・柱材）などが出土している。

調査の概要

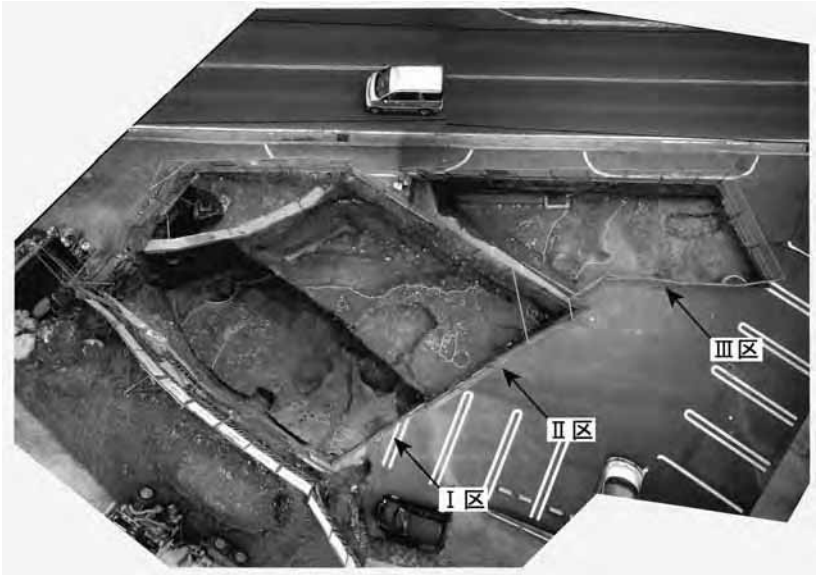
調査地は 1 次調査の南側で、国道 24 号線までの 256㎡である。隣接する店舗の進入路確保のため 3 分割で実施した。従って、ラジコンヘリコプターによる上空からの写真撮影も 3 回実施した。実測は手測りで行った。

調査地の呼称は北からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。現地表面の標高は約 89.5 m～ 89.2 mを測り、Ⅰ区からⅢ区にかけて緩く下がる。調査区全体にわたって撹乱が著しく、遺構密度は稀薄であった。

Ⅰ区～Ⅲ区の土層堆積状況は、上層部分は路盤の改良や配水管などの埋設工事などで撹乱されていた。この部分を機械掘削で除去し、それより下層の包含層を人力掘削とした。Ⅰ区では第 3 層とした上面に鉄分の沈着が認められる礫混じりの粗砂～細砂層、第 4 層とした径 3 ㎝以下の礫を含む粗砂～細砂層を人力掘削とした。第 5 層は細砂混じりの大振りな礫層で地山である。Ⅰ区では段丘の地山上でピット状遺構、土坑状遺構を検出した。他には 1 次調査から続く谷状地形の落ちを検出している。

Ⅱ区では僅かながら段丘上で厚さ 5 ～ 10 ㎝の 10YR5/1（褐灰）粗砂混じりのシルト層の中世包含層を確認した。遺構は段丘上で土坑､溝状遺構を検出し、Ⅰ区から続く谷状地形の肩を検出した。

Ⅲ区の土層堆積は路盤工事の整地層で撹乱されており、その直下は 10YR7/8（黄橙）シルトの地山であった。このベース土はⅠ・Ⅱ区では確認できなかった。遺構は段丘の地山上で幅約 2 m、深さ約 0.9 mの規模で、断面はU字状を呈する南北方向の溝を検出した。その埋土からは瓦器椀、土師器皿、常滑焼甕などが出土している。　（佐伯和也）



調査区全景　北上から

特別史跡岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理

遺跡の時代：古墳時代
所　在　地：和歌山市岩橋
調査の原因：史跡整備に伴う発掘調査等支援業務
調 査 機 関：2009.10 ～ 2010.03
調査コード：09-01・185-424

調査の経緯

和歌山県は、平成 15 年度より、特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業を実施している。当センターは、当該事業を効率的に遂行するための支援業務として、発掘調査、遺物整理業務を受託している。平成 21 年度は、和歌山県立紀伊風土記の丘担当者の指示のもと、前山Ａ 58 号墳の確認調査と大日山 35 号墳の出土遺物の整理を行った。

発掘調査の成果

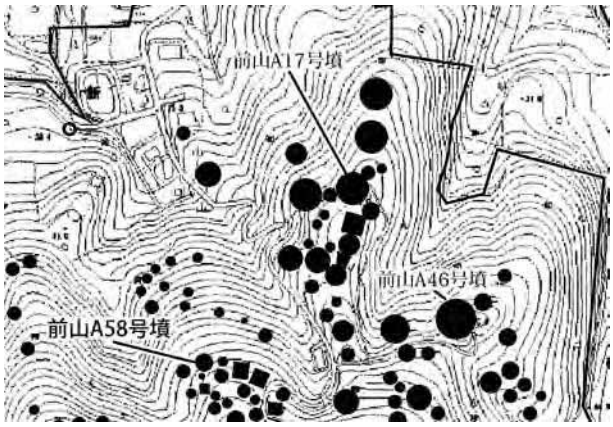
墳形確認のため、6 本のトレンチを設定した。また、石室内に堆積していた土砂を除去する作業を行った。

発掘調査の結果、前山Ａ 58 号墳が、突出部を有すること、墳裾や突出部に埴輪が樹立されていることを確認した。

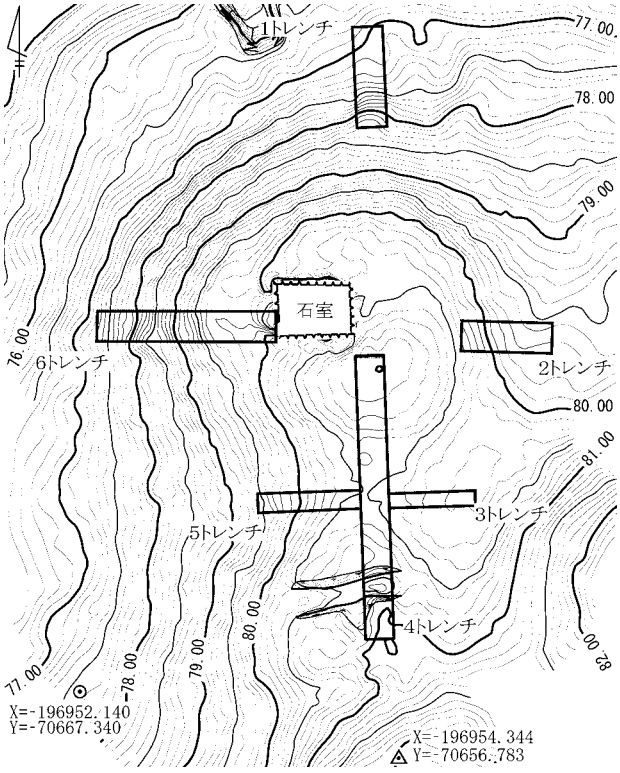
また、各トレンチの流土上や、石室内流入土中からも形象埴輪片が出土しており、円丘部頂にも埴輪が樹立されていた可能性が考えられる。

石室の調査では、羨道閉塞石が原位置を保ったまま検出されたほか、玄門部付近の形状を明らかにすることができた。また、玄室奥壁に沿って、屍床の構築痕があることを確認した。

出土遺物としては、玄室内、羨道部から須恵器が、



調査位置図　S=1:5,000



前山 A58 号墳確認調査　トレンチ配置図 (S=1:250) ※

各トレンチから朝顔形埴輪、石見型埴輪などが出土した。遺物、石室の構造や石室床面の観察から、５世紀後半には築造され、６世紀前半にかけて追葬が行われたと推定される。

整理の成果

昨年度に引き続き、埴輪の実測作業と復元作業を並行して実施した。写真の靫形埴輪は、平成 17 年度に実施された、大日山 35 号墳の調査で出土したものである。基底部を全て失っているなど、残存状態は極めて悪い。そのため、復元に際しては、紀伊風土記の丘担当者から、指示を随時受け、修正を繰り返しつつ、作業を実施した。

これ以外にも、破片資料が多いが、形象埴輪を中心に復元・図化を実施した。　　（岩井顕彦）

図・写真のうち、※印は、和歌山県教育委員会提供

靫形埴輪※

県指定史跡水軒堤防の発掘調査

遺跡の時代：江戸時代
所　在　地：和歌山市西浜
調査の原因：和歌山下津港本港１号道路交差点改良工事
調 査 機 関：2009.10 ～ 2009.12（現地発掘調査の期間）
調査コード：08-01・史 19-2

遺跡の概要

県指定史跡水軒堤防は、和歌山市西浜に所在する江戸時代に築かれた防潮・防波堤防である。平成 17 年度に実施された道路拡幅工事に伴う発掘調査やその後の３年次にわたる和歌山県教育委員会の確認調査などにより、ほぼその全容が明らかにされてきている。それによれば、石堤は和泉砂岩の切石を主体として構築されており、高さ４m、全長約 1㎞におよぶ長大かつ堅固なものである。さらにこの石堤を背後から補強するように高さ５mの土堤が取り付いており、石堤と土堤を合わせた基底部の幅は 20 m以上であることなどが判明している。

石堤全景　南西から

トレンチ１ 胴木結合部　西から

調査の成果

今回の調査では、これまで不明確であった内部構造や基底部構造等をはじめて明らかにすることができた。

海側の基底部に用いられている基底石は、上部の石材に比べ突出した大きさではないもののやや大振りなものを用いる傾向が窺えた。この基底石の下で胴木を検出した。胴木は直径約 15㎝のマツの丸太材である。胴木の継手部はそれぞれ先端から長さ 30㎝ほどを半裁して重ね合わせ、重複部に穿ったホゾ穴に木製の楔を打ち込むことにより両者を固定している。この胴木はベース土である砂層上に 20㎝程度の厚さで礫を敷詰めた後設置している。またこの胴木を固定するために海側に直径 6㎝前後のマツの木杭を約 30㎝間隔で打ち込んでいる。

さらにこの基底部の前面には海側に向かって５m以上の石敷きが施されていることも確認することができた。石敷きは１m前後の幅で階段状に海側へ下っている。確認できなかった部分も多いが、この段差部分の石を固定するために胴木と同様に直径 6㎝前後のマツの木杭が打ち込まれていた。

内部構造については、断面観察の結果、海側の法面に施された石材の奥行きは平均 70㎝前後で表面の辺長に対する奥行きの比は 1:2 ～ 2.5 とかなり大きくとっている。また設置角度も法勾配に対して 90 度という力学的に最も強度が高くなるように据えられていた。先に述べた基底部及び石敷きは洗掘による石堤の崩壊を防ぐ消波を考慮したものであり、法面の強度は波浪エネルギーへの対処であることを思えば築堤に当たってその強度に十全な配慮がなされていたことが窺われるものと言えよう。　（村田　弘）

石堤断面　南から

八丁田圃遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・鎌倉時代
所　在　地：田辺市秋津町
調査の原因：近畿自動車道紀勢線事業
調 査 機 関：2010.01 ～ 2010.03
調査コード：09-35・64

遺跡の概要

八丁田圃遺跡は、田辺市秋津町字東八町・西八町を中心に所在する遺跡で、JR 紀勢本線「紀伊田辺」駅より北へ約２㎞に位置する。遺跡は、左・右会津川の合流する地点で、会津川が形成した沖積平野に展開する弥生時代を中心とした遺跡である。北側及び東側は、標高 100 m以下の低丘陵により囲まれた地形を呈している。

調査の概要

遺構の主だったものとして、弥生時代前期末から中期初頭の可能性のある土坑６基・柱穴９基、時代不明の小穴４基・地震の液状化に伴う噴砂の可能性のある粗砂細礫層の広がり５箇所がある。遺構検出面は、T.P=8.30 m前後にある。

柱穴と考えた遺構では、建物を構成する柱並びを確認することができなかった。

出土遺物の大半は、弥生時代の遺構から出土した弥生土器で占められる。出土遺物には、弥生土器壺・甕などがある。その他、現代の水田耕作土及び床土から出土した江戸時代の陶磁器類がある。

弥生土器の大半は、風化・磨滅による損傷が著しく、取り上げに際して殆どが出土状況の原形をとどめない状況にある。

遺構掘削状況全景　西北西から

なお、補足調査に伴い T.P=8.10 m以下の堆積層においても遺物の出土を確認した。その内、一箇所の落ち込みから弥生土器の壺・甕が出土し、土器の形態及び文様構成から弥生時代前期後半に属することが確認できた。

まとめ

今回の調査では、弥生時代前期後半から中期前葉にかけてと考えられる遺構・遺物が検出できた。検出した数量は少ないが、今回の調査地の南西側約 250 mに位置する八丁田圃遺跡の中心から離れた遺跡周辺部の在り方が想起されるものである。

また、遺構検出面の堆積層中の遺物の包含は、今回の調査だけでは広範に広がるものであるのか、局部的な在り方であるのか、判断し難い状況にある。今後の調査において留意する必要のある点である。

（土井孝之）

調査位置図　S=1:25,000

弥生時代の土坑遺物出土状況　西北西から

西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：縄文時代～室町時代
所　在　地：伊都郡かつらぎ町丁ノ町・西飯降
調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）改築
整 理 機 関：2009.04 ～ 2010.03
調査コード：06-13・26、06-13・27、07-13・27

平成18年度と平成19年度に行った、西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡では、縄文時代の集落、弥生時代中期の集落、古代の建物群や条里水田など長期に及ぶ各時代の遺構が発見された。調査で出土した遺物の中には、北陸地方から運ばれた石斧や、弥生時代の絵画土器、県内最古の下駄など類例の少ない遺物も存在する。

整理作業の最終年度となる今年度は、遺物の実測・トレース、遺構のトレース・組版、写真撮影、報告書の執筆、編集を行い、調査報告書を刊行した。

写真：丁ノ町・妙寺遺跡

整理作業の成果は多岐にわたるが、弥生時代では、紀ノ川上・中流域でのまとまった土器一括資料を提示し、紀ノ川下流域との土器様相の比較が可能となった。また、時期ごとの集落の動向を整理し、弥生時代中期から後期への集落の変化を考えた。

さらに、整理作業とともに合わせて実施した、自然科学分析では、胎土分析を実施し、土器の胎土について類型化を行った。注目される弥生時代の絵画土器は、大和地域とされる土器の胎土の鉱物組成に類似することが判明した。（田中元浩）

田辺城下町遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：弥生時代～江戸時代
所　在　地：田辺市南新町・湊
調査の原因：元町新庄線外１線道路改良事業
整 理 期 間：2009.10 ～ 2010.06
対象コード：07-35･104、08-35･104

平成18・19年度におこなった道路改良工事に伴う発掘調査で出土したコンテナ92箱の土器類についての整理作業を10月から３月にかけて実施した。原稿執筆や諸作業の一部は次年度に繰り越し、６月に報告書刊行の予定である。

砂丘上に立地する遺跡で、調査では弥生時代の土壙墓、古代の土坑、中世の掘立柱建物・溝・井戸・土坑、江戸時代の城下町の町屋を構成する礎石建物・石積土坑・埋桶などが見つかっている。出土遺物では江戸時代末頃の遺物が豊富で、当時の生活を垣間見ることができる。

南紀男山焼

江戸時代の国産染付の中に、銘をもつ南紀男山焼が２点ある。南紀男山焼は幕末から明治時代前期にかけて広川町にあった陶磁器窯で焼かれた製品で、調査ではこれ以外にも南紀男山焼と考えられるものが10点余り出土している。写真は、中国製品の文様を模した芙蓉手皿で、高台内にあった南紀男山の銘を釘先などで意図的に消している。中国製品と偽って販売することを目的とした可能性も考えられ、興味深い資料である。（川崎雅史）

野田地区遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：古墳時代～室町時代
所　在　地：有田郡有田川町野田・天満
調査の原因：高速自動車国道近畿自動車道
　　松原那智勝浦線建設
整 理 期 間 ：2009.03 ～ 2009.10
対象コード：05-21･038、06-21･038、07-21･038

平成 17 ～ 19 年度の 3 箇年にわたる発掘調査で出土したコンテナ 38 箱分の土器や約 100 点の木製品の整理作業と、報告書作成に伴う諸作業を昨年度に引き続いておこなった。

発掘調査では、低地を流れる流路から豊富な土器や木製品が出土している。立地や出土遺物から判断して、遺跡付近は古墳時代以降中世にかけて神聖な空間で、水辺の祭祀等がおこなわれていた可能性が考えられ、それらには古代においては当地方の郡司を務めた紀氏の関与が考えられる。

整理作業は 4 月～ 7 月にかけておこない、10 月に報告書を刊行した。作業内容は、遺物の注記・接合・復元・実測、遺構・遺物実測図トレース、遺物写真撮影、図・写真の組版で、それらの作業と並行して原稿を執筆し、報告書作成を行った。また、遺物移管に備え遺物登録台帳、実測図台帳、コンテナ台帳を作成した。このほか、植物珪酸体分析を株式会社パレオ・ラボに、木製品の保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。　（川崎雅史）

古墳時代の土器

埋蔵文化財関連整理業務

遺跡の時代：―
所　在　地：―
調査の原因：―
業 務 期 間 ：2009.12 ～ 2010.03
調査コード：―

本業務の正式名称は「平成 21 年度和歌山県緊急雇用創出事業臨時特例基金活用事業に係る埋蔵文化財関連整理業務」といい、緊急に雇用を創出することを目的として事業化された。このため作業員は公共職業安定所を通じて雇用した。

和歌山県では、これまでの発掘調査で出土した遺物を県内の 5 つの施設に分散収納している。報告書に掲載されている遺物についても同様であり、県内外からの問い合わせに際して、きわめて不便な状況にある。このため報告書に掲載された遺物については極力一ヵ所に集約させ、その利便性を高めることが望まれていた。また、増え続ける土器等に対して収蔵施設の容量が限られることから、報告書掲載外の遺物についてはコンパクト化をはかり再収納する必要が求められていた。

整理業務は主に川辺収蔵庫 (日高川町) において実施したが、ここでは鳴神地区遺跡・田屋遺跡・根来寺坊院跡などの調査で出土した遺物を対象とした。報告書に掲載されている遺物については、報告書との照合を行い、該当遺物に図番号を付し、ビニール袋に納めた上で、コンテナに再収納した。さらに照合結果を記した遺物実測図を個々のコンテナに添付した。

その後、報告書に掲載された遺物については、和歌山市岩橋に所在する収蔵庫 (A) 及び新収蔵庫 (B) に搬送し、収納した。また、これとは逆に岩橋の収蔵庫に収められていた報告書掲載外の遺物の入ったコンテナを川辺収蔵庫に運び入れて収納した。川辺収蔵庫から岩橋の収蔵庫 (A・B) へは 631 箱、岩橋の収蔵庫 (A・B) から川辺収蔵庫へは 1,090 箱を移動した。また再整理を行ったものについては、遺跡毎に新たなコンテナ台帳を作成した。

上記の作業を行った結果、報告書掲載遺物を集約するとともに、新収蔵庫 (B) に 850 箱ほどの収納スペースを確保することができた。　(村田　弘)

重要文化財 旧中筋家住宅の保存修理

建 築 年 代：江戸時代末期
所　在　地：和歌山市禰宜
修理の種類：半解体修理
修 理 期 間：2000.2 ～ 2010.3

はじめに

旧中筋家住宅は和歌山市東部郊外に所在する江戸時代末期の大庄屋の遺構で、主屋ほか 5 棟が重要文化財に指定されている。管理団体である和歌山市によって、平成 12 年 2 月から保存修理工事が進められてきており、平成 21 年度はその最終年度であった。本年度も引き続き、和歌山市からの委託により当センターにおいて設計監理業務と工事発注業務を行った。

主屋の修理

主屋は半解体修理で進めてきたが、前々年度までに主要な工事をほぼ完了していた。21 年度は残っていた襖工事、畳工事、電気工事を中心に進めた。

旧中筋家住宅には 100 枚余りの襖が建て込まれており、大半が唐紙を張っていた。いっぽう一番上格の座敷である大広間は、無地の鳥の子紙を張っていた。破損していた襖は上張りをめくりとり、骨と下張りの補修を行った。上張りの唐紙をめくるさい、良く観察すると、上張りの下に元の上張りがそのまま残されていたり、もしくは断片が残っていたりした。これにより襖上張りの変遷を、ある程度把握することが出来たのである。襖骨や襖縁、引き手金具は修理してほとんどを再用し、上張りの唐紙は４種の図柄を伝統的な木版手摺り製法により復原製作した。

旧中筋家住宅の位置　出典：「電子国土」URL http://cyberjapan.jp/

畳は保存状態をよく調べ、そのまま再用する畳、表替えをする畳、取り替えて新調する畳の３つに分類した。旧中筋家住宅の主屋は、畳が良く保存されており、手縫いの畳床に、手織りの畳表がほぼ一式残されていた。日常は畳上に敷き紙を入れ、上敷きを敷き込んで使われていた。畳が大切であったからなのだろう。今回の修理にあたり、そのまま再用する畳には、在来の日常的な使い方を踏まえ、敷き紙を製作して畳上に敷き、さらに特注製作の上敷きを敷き込み鋲止めした。表替えとした畳は古い表をめくり取り、畳床を部分的に修理し、新しい畳表を付けた。新調した畳は床は手縫い床と敷き合わせた部屋では手縫いの床に表を付けた。手縫い床は既に平成 15 年度に新調しておいた分を用いた。その他の床は機械縫い品としたが、昔ながらの一畳掛けの製畳機を用い、手縫い床とあまり違和感のないよう藁の量を調節して縫い上げた。畳表、畳床は全て国産材料を用い、畳表は部屋の格によって、中継ぎ表、備後表を張り分けた。

電気工事は屋内配線と照明、コンセント等の器具取り付けを行った。文化財の価値を損ねずに施工されるよう工事監理を行った。

その他建造物の修理

屋敷正面にある表門も前年度までにほぼ工事を完了しており、今年度は基礎工事、襖工事、畳・電気工事を中心に進めた。基礎工事では背面側土間叩きと門構えの洗い出し土間仕上げを施工した。襖工事は主屋同様、襖修理を行った。襖はほとんどを再用した。唐紙は一寸筋柄を木版手摺り製法で復原製作した。表門の畳は手縫い床、機械縫い床が混在し中古の転用品であ

竣工主屋正面外観

ると見られたが、カミノマ、ナカノマは古い床を修理して再用し、表替えをした。その他の部屋は全て新調した。電気工事は屋内配線と照明、コンセント等の器具取り付けを行った。

屋敷の西側にある長屋蔵と北蔵は電気工事を行った。これは活用計画の策定に伴うもので、昨年度で基本設計を終えており、今年度は発注用の設計書を作成した。照明器具、コンセントを文化財になるべく傷めずに取り付けるよう工事監理を行った。

土塀は北土塀の西側と西土塀、南土塀の修理を行った。北土塀の西側は昨年度までに中塗りまで完了しており、西土塀、南土塀は本体積みまで完了していた。本年度では以降、仕上げ塗りまでの工事を行った。また併せて土塀の雨落ち溝の修理も行った。黄土塗りで漆喰の鉢巻を巻いた美しい仕上がりとなった。

共通仮設工事

修理工事の完了に伴い、北側の隣接敷地に仮設で建設していた、工事事務所、休憩所、工作保存小屋の撤去工事を行った。また撤去後、敷地を畑地に復旧する工事をし、工事監理を行った。

竣工表門外観

主屋大広間

保存図・報告書

保存修理の進捗に伴い「保存図」の作成も進めてきた。これは重要文化財の根本的な修理にあたり、国で図面を永久保存するため作成するもので、大きさ 98.5 × 68.0 cm のケント紙に、烏口で墨入れ仕上げすることが決められている。旧中筋家住宅は棟数が多いため、作成した保存図は 65 枚となった。保存図は所定の規格にのっとり、ケント紙に鉛筆で下書きし、墨入れを行い完成させた。文化庁担当官による検収後、国の図面保管庫で永久保存されることになる。

保存修理事業の最後に修理工事報告書を刊行することになっており、当センターで執筆編集を行った。報告書は本文編、図版編の二部立てで、図版編はコロタイプ印刷である。300 部が和歌山市より刊行され、文化庁指定機関に配布された。

おわりに

文化財修理事業は平成 21 年 12 月 31 日をもって全て完了した。その後は防災設備事業、展示事業などが行われている。そして平成 22 年の夏頃から、いよいよ一般公開となる予定である。（御船達雄）

主屋土間

北土塀上塗りの状況

旧中筋家住宅内塀・通用門の復元

建築年代：新築復元
所 在 地：和歌山市禰宜
工事期間：2009.6 ～ 2009.11

旧中筋家住宅の公開活用に向け、和歌山市では屋敷内にかつて存在した内塀、通用門を復元し、かつての屋敷景観を整えることとした。設計と発注業務を当センターが受託した。

旧中筋家住宅の主屋と表門との間には、東に庭園、西に前庭が設けられている。かつてこの間を仕切る内塀があった痕跡がある。庭園は主屋座敷に対した内向きの庭園で、いっぽう前庭は日中人が出入りする空間であるから、両者を仕切る塀が必要だったのだろう。しかし現在、ここに塀があったことを明瞭に記憶している人はいない。所有者の楫本氏によれば、同家が住まうようになった昭和 28 年には、既に塀はなかったという。中筋家が転出した代の三男であった中谷氏も、何か塀のようなものはあったとは思うが具体的には記憶してないという。古写真でもここに塀などが写るものは発見されていない。内塀は相当以前に取り壊されたようである。

塀の痕跡は次の通りであった。まず主屋式台玄関東柱の東面に三つの掘り込んだ仕口がある。このうち一番上は寄せ蟻に、その下二つは下げ鎌になっており、引き抜き力に備えた仕口である。また同柱の南面には高さ 170cm 程の位置に屋根面のアタリらしい斜めの風食差が残る。いっぽうの表門シモノマ北側の戸袋には、戸袋屋根板が切り欠かれた痕跡があり、下部の土台にも欠き込みがあった。そして両棟の間には砂岩布石と、雨落ちの縁石が小端立てで残され、若干の玉石も残されていた。これらの痕跡から、内塀は木造軸組に屋根を掛けたものであったと推定されたが、これを文化財修理事業で復原するには意匠面で復原根拠が少なすぎた。今回の工事は、建物の痕跡に矛盾することなく取り合いながらも、意匠面では根拠はない新築復元とした。

痕跡から土台を据え柱を建てた腕木塀形式とし、高さは式台玄関柱南面の風食差を、軒の出は雨落ち縁石を基準に決定した。柱間は一間を切る程度に割り付けた。式台玄関柱東側の三つの痕跡は、一番上部を差物仕口と考え、下部二つを胴縁と考えた。意匠は主屋・味噌部屋間の塀をモチーフとし、全体意匠と各部ディテールを整えた。また表門側の一番南側の柱間には、東西に通れるよう開き戸を設けた。

人力車庫北西から長屋蔵南東間の土塀の中央には、かつて通用門があった。門は所有者である楫本氏の記憶にもあり、小さな瓦葺きの門で、この門を通って屋敷地の南西へ出入りしたという。県教委所蔵の古写真の中には、片隅に小さな切妻屋根が写っているものもあった。ここの土塀の調査では、土塀が半ば崩壊していたため判然としなかったが、門の間口は 150cm 程度と推定された。今回復元整備する通用門は、屋敷景観を再現しつつ所有者住宅の門としても使われるため、使い勝手を考慮する必要があった。車椅子での通行も考慮し間口を若干広げ 176cm（5 尺 8 寸）とし、引違戸を建て込むことした。構造は棟門形式とし、内塀同様、腕木や軒廻りの納まりは、主屋・味噌部屋間の塀に倣って整えた。（御船達雄）

竣工した内塀を西より見る

竣工した通用門

重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所 ほか１基の保存修理

建 築 年 代：江戸時代前期
所　在　地：伊都郡高野町高野山
修理の種類：半解体修理・屋根葺替
修 理 期 間：2008.1 ～ 2013.3

概　要

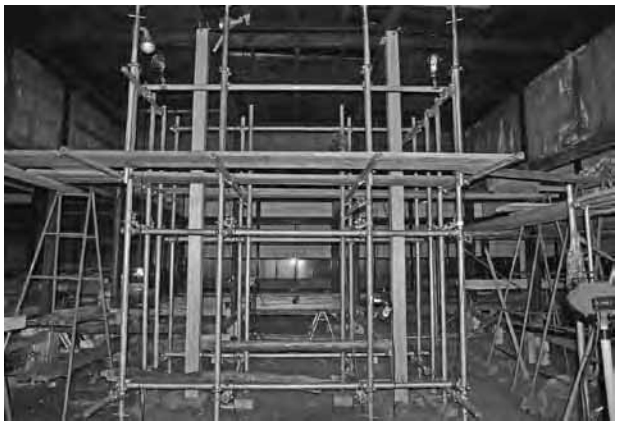
当事業は平成 20 年 1 月から平成 25 年 3 月まで、63 ヶ月をかけて行う。本年度は 3 年度目となる。屋根葺き替え工事を主とし、軸部の建て起こし・不陸調整、障壁画の修理等を行う。屋根葺き替えに先行して木部の修理を行っており、昨年度までに建て起こしに際して必要となる床組や柱間装置の解体及び、柱の根継ぎが完了した。また平行して解体部材や建具の繕い、表具の修理を行った。

客殿部分

建立当初は柱が存在したが、後世に抜き取られたことが確認できた箇所（客殿部分９本）に軸部の補強を目的として柱を挿入した。同時に軸部の不陸調整や建て起こし、柱位置の修正などを行った後、床組を組み立てた。その際、根太や大引などの床組材には防腐・防虫剤を塗布した。

大広間・角の間境及び次の間・上段の間境の内法長押、大広間南面桟唐戸上の長押及び鴨居は共に歪みや破損が目立ったため、適宜解体して修理を行った。この修理に伴う解体により、大広間・角の間境の漆塗り鴨居の上面に「安政五年午六月大工成三郎作」と書かれた墨書が見つかった。長押下端の痕跡と併せて考察すると、安政５年(1858)に現状の漆塗り鴨居が 付く

金剛三昧院の位置　出典：「電子国土」URL http://cyberjapan.jp/



補強柱の挿入（持仏の間）

以前は付け樋端であったことが推定できた。

上段の間西広縁は、建物の建立当初は外部に間仕切りがなく、吹放しとなり開放的な空間を演出していたが、後世に間仕切りが入り、室内に組み込まれていた。今回の修理工事では当該部分の復原は行わないが、周囲の組立工程を調整して、一時ではあるが当初の姿を再現した。（巻頭写真７）

取り替え材や新補材の見え掛かりには、周囲の古材と馴染むよう、古色塗りを施した。古色は水に茶粉、弁柄、墨を混ぜたものを塗布して乾燥させた後、柿渋を塗布した。また必要に応じて、煎った糠を詰めた布袋で磨き、艶出しを行った。施工方法や色目は手板を作成して検討した。

天井の補修や補強柱挿入に関連して天井を一部解体する箇所について、天井裏堆積物を除去した。堆積物は煤の他、桧皮片やこけら片、木片など、過去の屋根葺き替え時に当時の屋根材が小屋裏へ落下したもので、中には混ぜ葺き（桧皮とこけらを交互に葺いたもの）も見つかった。客殿及び台所は建立当初はこけら葺きだったことが知られているが、桧皮葺に変更した時期については明らかでなかった。しかし今回、天井

大広間・角の間境、内法長押の修理（左上：鴨居上面の墨書）

玄関の揚屋状況

寺務所天井の修理完了状況（屋根裏から見る）

裏に堆積していた旧屋根葺き材の内容を検討した結果、少なくとも玄関建立時（宝暦８年(1758)建立・棟札より）には桧皮葺だったことが判明した。

その他、客殿部分は外周部の建具の建て込みが完了し、壁板等の組立、小壁の補修・塗り直し、襖や貼り付け壁、畳の建て込みを残すのみとなった。

玄関部分及び正面側廻り

正面側廻りは沈下が激しく、南広縁の床は大きく傾いていた。これは昨今のことではなく、玄関建立時にはすでに幾何かの沈下があったようで、側廻りの不陸補正を行うには玄関部分も同時に持ち上げる必要があった。しかし玄関部分は傷みがないため、解体せずに揚屋して礎盤下に飼物を挿入することにより対処した。また、南広縁では傾斜や沈下が目立つ礎石は据え直しを行ったが、その際現状礎石の下に前身建物のものと考えられる礎石が見つかった。軸部の組立完了後、濡れ縁を組み立て、犬走りの土間叩きを施工した。

台所部分

寺務所西室の天井板や蟻壁長押に傷みや歪みが進行していたため、解体して修理を行った。廻り縁と竿縁は健全であったため据え置いた。天井板は板厚が端部で６～９ミリメートル、中央部で３～６ミリメートルと非常に薄いため、大部分が木目方向に沿って割れていた。また裏面は凹凸があり、木材での補修は困難なことから、割れている部分に裏から紙を張ることで繕いと補強を行った。結果、破損の進行状況にも関わらず、３分の２の古材を再用することが出来た。また調査により、廻り縁及び竿縁は建物建立当初から他の建物の転用材が用いられていることが判明した。

その他

客殿と台所に共通して、柱間の広い箇所は中央部で小壁の垂下が目立った。これに対処するため、補強金具により小屋梁などから吊り束や貫を引き付ける構造とした。また、柱に開きが生じている箇所も、土壁の中などの見え隠れ部分に金具を取り付けて補強した。

解体時に撤去した電気設備の配線を行った。昨年度に引き続き、表具の修理を進めた。また桧皮の購入も行い、次年度から始まる屋根工事に備えた。

解体に伴う調査により客殿及び台所の変遷を明らかにし、所有者と協議の上復原案を作成し、文化庁の手続きを経て現状変更を行う運びとなった。台所東面軒の復原や柱間装置の整備を行う。　（結城啓司）

寺務所西面の補強金具取り付け状況（丸線内に補強金具）

表具の修理状況

重要文化財 鈴木家住宅の保存修理

建 築 年 代：天明 5 年(1785)
所　在　地：有田郡有田川町中峯
修理の種類：屋根葺替、部分修理
修 理 期 間：2008.12 ～ 2009.9

平成 21 年 9 月､10 箇月の期間をかけて重要文化財鈴木家住宅保存修理事業が完了した。今回は茅屋根の葺き替えと、土間たたきや竈の補修を行った。

茅屋根は昭和 57 年に実施された解体工事の際に葺かれたものであるが、その後台風などでの部分的な破損や経年による棟飾りの腐朽に対しても、そのつど所有者によって適切な補修が繰り返されてきたため、修理前にも大きな雨漏りなどは生じておらず、屋根下地の状況も良好であった。

茅材の調達については有田川町と紀美野町の協力を得て、地元生石高原のススキを一部利用した。

山焼きのイベントで知られる同高原では、定期的に

屋根葺き替えが完了した外観

人の手が入れられているため雑草も混ざらず、ススキの株も毎年更新されるため真っ直ぐに育っているなど、屋根材としては極めて良好な品質を有していた。

鈴木家の周辺でも以前は集落ごとに茅場を持ち、多くの茅屋根を共同で維持してきたと言う。時代とともに建物を守る環境が変化してしまったが、茅葺きの文化財建造物が数多く残る有田川流域において、今回は葺き替えに必要な数量の 4 割程度にとどまったとは言え、地域の材料を用いて茅葺屋根を維持していく取り組みに着手できた意義は大きい。　（多井忠嗣）

県指定文化財 旧小早川梅吉氏住宅の保存修理（紀伊風土記の丘民家等修繕）

建 築 年 代：18 世紀後期
所　在　地：和歌山市岩橋
修理の種類：屋根部分修理
修 理 期 間：2009.5 ～ 2010.2

旧小早川梅吉氏住宅は日高川町上流の山間部に建てられた古い形式を伝える二間取りの農家で、紀伊風土記の丘へ移築後、一般に公開されている。

前回の葺き替えから十数年が経過し、茅葺屋根の傷みや弛緩が目立ってきたため、棟飾りのやり替えと差し茅による平葺きの補修をおこなった。

屋根頂部には杉皮が葺かれ、押さえ竹を介して針目覆という独特の部材で押さえた上に鳥衾竹が架けられる。この棟飾りには地域性がよく表れ、茅葺の農家を象徴する部位であるが、竹や縄が多用されているため傷みやすく、定期的な取替が必要となる。

今回の修理においては、公園内に生える竹を適期に

差し茅の終わった屋根

伐採し、池に漬けて養生するなど、工事施行前から段取りを進めることによって取替材の十分な品質確保に努めた。また従来の納まりに準じながらも、押さえ竹の一部を銅管に替えるなどの補強策を講じた。

差し茅とは、緩んできた平葺き部分に新しい茅を差し込むことにより、屋根面全体を締め直す補修方法である。定期的に手をかけ続けることにより、材料や建物を長持ちさせる伝統的な知恵であるが、メインテナンスフリーや使い捨てと言った現代的な生活のあり方に対して示唆するものは大きい。　（多井忠嗣）

丁ノ町・妙寺遺跡出土の石錘

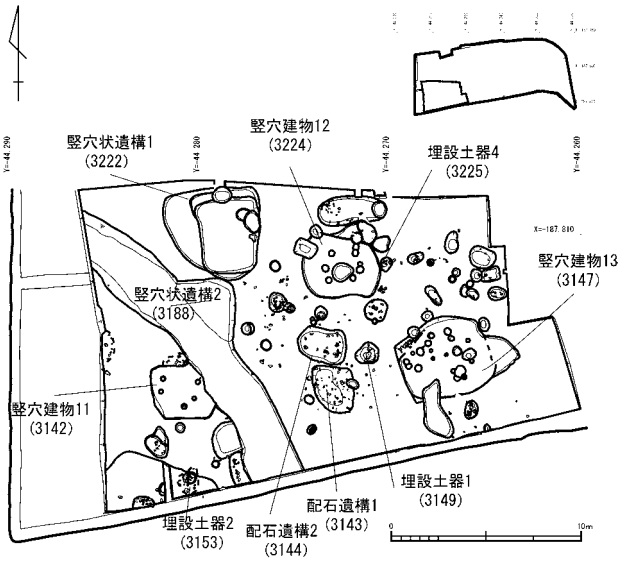
概要：丁ノ町・妙寺遺跡から出土した石錘について、形態、法量から分類を行った。その結果、切目石錘、打欠石錘の両者で共通する形態・法量が存在し、両者が同じ機能で用いられていたことがわかった。こうした事実は網着装状況をうかがわせる石錘の出土状況からも補強されるだろう。また、周辺の遺跡の状況からは、石錘を用いた網漁は、吉野川流域、紀ノ川上・中流域での生業活動の中心を占めたことが想定できる。

はじめに

平成20年度に行った、かつらぎ町丁ノ町・妙寺遺跡の発掘調査では、縄文時代後期初頭（中津式～福田ＫⅡ式）の集落を検出した。集落は配石遺構を中心とし、竪穴建物３棟、竪穴状遺構、埋設土器、集石遺構が環状に配置され、当該時期の良好な集落遺跡の調査例となった（本文20p参照、財団法人和歌山県文化財センター2009）。

遺構・包含層からは多くのの土器・石器が出土しており、中でも、大量に出土した石錘は集落の生業を特徴づける遺物といえるだろう。石錘は未報告のものも含め、総出土点数で87点出土している。縄文時代の遺構を検出したわずか450㎡という範囲を勘案しても、その出土量は多い。

報告書では紙面の都合上、資料の提示と事実関係の報告にとどめたが、まだまだ検討が不十分である。そこで本稿では、丁ノ町・妙寺遺跡から出土した石錘を改めて検討し、集落の生業について考えてみたい。



丁ノ町・妙寺遺跡縄文時代遺構配置図（S=1:400）

出土石錘の概要と分類

石錘は、浅い溝状の擦り切りによって紐掛けとする切目石錘（Ｓ141～Ｓ177）と、打ち欠いて紐掛けとする打欠石錘（Ｓ178～Ｓ197）の両者が存在する。

紐掛けは長軸の両端に施すものを基本とするが、一部の石錘には、一端のみに切目の紐掛けをもつものも散見する（S142・S158・S167・S173～S177・S188）。石錘の擦り切り、打ち欠きは、表裏２方向から擦り切り、打ち欠きを行い紐掛けとするものと、１方向から擦り切り、打ち欠きを行うものの２種類が確認できた。

また、報告書未掲載の自然礫の中には、切目・打ち欠きをもたないが石錘と同じ形態をもつものが存在する。角の無い丸い石材で、石錘と同様の法量をであることから、石錘未成品または、石錘素材と考えられる。

石錘の石材は、砂岩、結晶片岩、チャートなど様々であるが、切目石錘には砂岩、結晶片岩が、打欠石錘にはチャートが用いられる傾向がみられる。

石錘は、形態、法量から以下の６つに分類した。

Ⅰ類（Ｓ141～Ｓ154）：長さ6.5㎝以上～8.5㎝未満、幅２～３㎝、厚さ0.9～1.5㎝程度の細長棒形のもの。

Ⅱ類（Ｓ155～Ｓ163）：長さ５㎝以上～6.5㎝未満、幅２～３㎝、厚さ0.9～1.5㎝程度の米粒形のもの。

Ⅲ類（Ｓ168～Ｓ170）：長さ7.5㎝以上～８㎝未満、幅４～５㎝、厚さ１～1.5㎝程度の小判形のもの。

Ⅳ類（Ｓ171・Ｓ172・Ｓ178～189）：長さ６㎝前後、幅4㎝前後、厚さ１㎝前後の楕円形のもの。

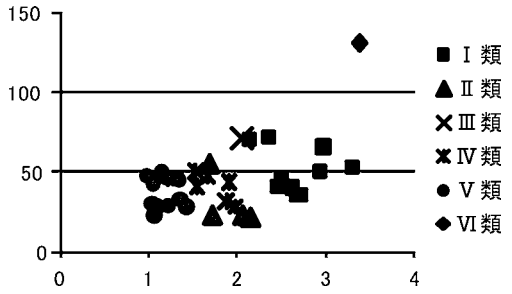
Ⅴ類（Ｓ173～Ｓ176・Ｓ190～Ｓ197）：長さ2.8㎝以上～４㎝未満、幅３～3.5㎝、厚さ１～1.5㎝程度の小型円形のもの。

Ⅵ類（Ｓ198）：長さ12.8㎝、幅3.8㎝、厚さ1.7センチ程度の長細形のもの。石材の長辺の中央を打ち欠くもの。

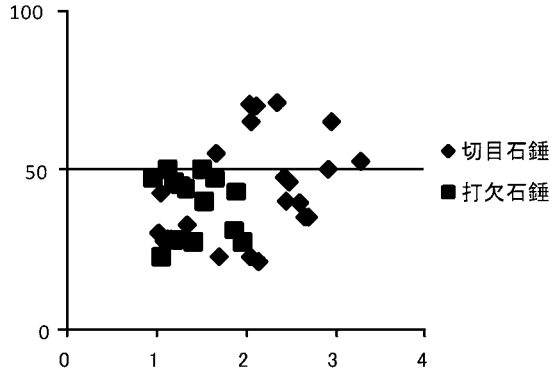
Ⅰ類からⅢ類については切目石錘のみであり、Ⅳ類・Ⅴ類は切目石錘・打欠石錘の両者が存在する。

Ⅵ類については、紐掛け方法、形態、法量が他の石錘とは異なりその他の用途が考えられる。

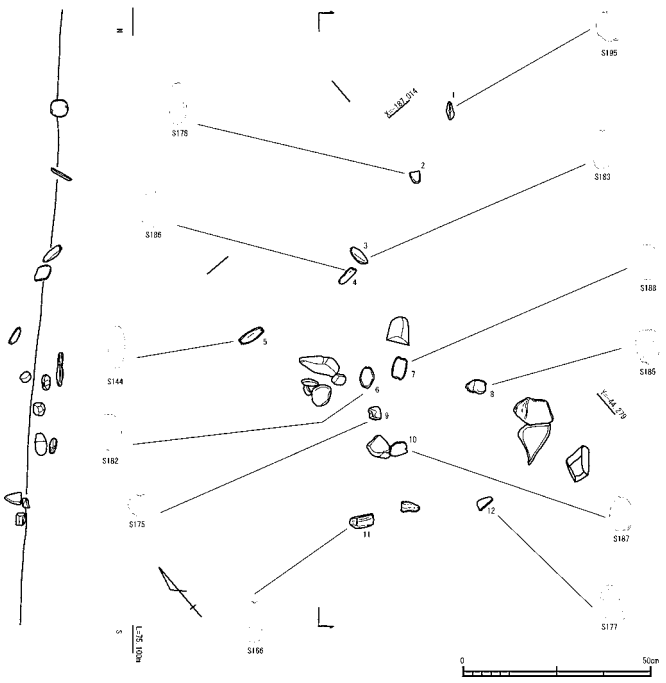
石錘の重量については、切目石錘は平均43.7g、打欠石錘は平均39.2gであり、切目石錘の方が重い。こうした傾向は、五條市上島野遺跡でもみられるが、近



石錘形態分類と法量散布図



切目石錘・打欠石錘の法量散布図


竪穴状遺構２（3188） 石錘集中区出土状況図（S=1:20）

畿地方では一般的に打欠石錘が重い傾向にあり、異なる様相を示す（大下 2004b）。

また、分類別の平均重量は、Ⅰ類 50.4g、Ⅱ類 28.4g、Ⅲ類 70g、Ⅳ類 37.8g、Ⅴ類 36.2g、Ⅵ類 130g となる。長幅比と重量から、Ⅵ類が大型品、次いでⅠ類・Ⅲ類が中型品、Ⅲ類～Ⅴ類が小型品に分類され、おおむね３種類程度の法量区分が存在するものと思われる。検討結果からは、Ⅳ類～Ⅴ類は切目石錘、打欠石錘の両者において、長幅比と重量がともに共通し、大きな差異は認められないことが分かった。

石錘の出土状況

丁ノ町・妙寺遺跡では竪穴建物をはじめとして、多くの遺構から石錘が出土している。中でも、竪穴状遺構２（3188）からは、合計 30 点の石錘が集中して出土している。竪穴状遺構２は竪穴状の落ち込みであり、床面が平坦で掘形が垂直に立ち上がる。竪穴建物の可能性も考えられるが、柱穴、炉等は検出できていない。遺構の時期は縄文時代後期初頭（中津Ⅱ式）と考えられる。この竪穴建物の床面では、石錘が集中して出土しており、石錘の機能を考える上で興味深い出土状況を示す。

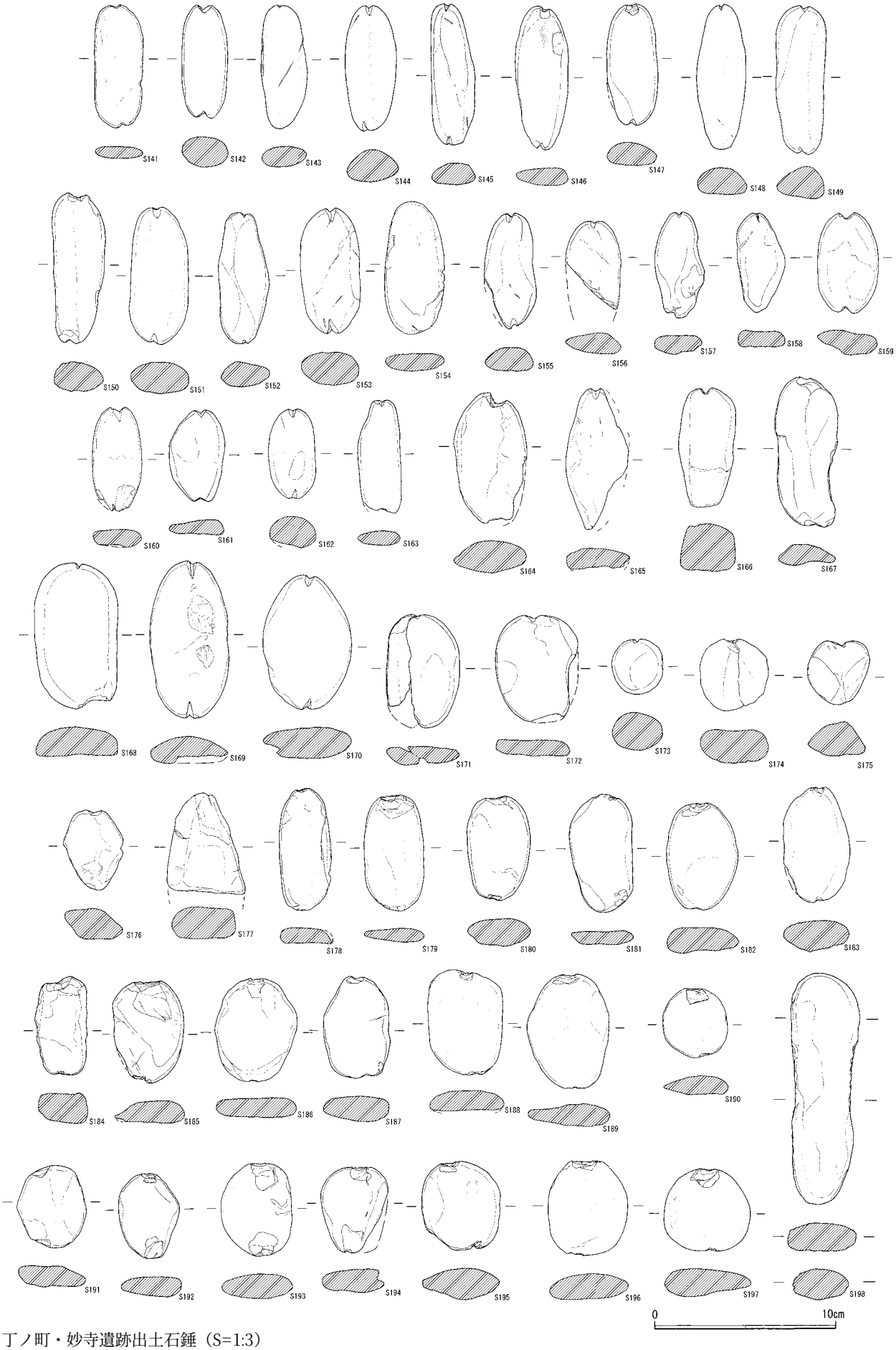
石錘は、約 1.0 m の範囲に 15 点余りが集中しており、ほぼ同じレベルで出土している。廃棄された状況を良好にとどめており、おおよそ２個１まとまりで直線的に並んで出土している。

他の遺跡の類例を参照すると、庄原市久代東山岩陰遺跡や、揖斐川町山手宮前遺跡、揖斐川町戸入村平遺跡では石錘の集積遺構が存在し、網着装が想定される糸巻きの帯状痕跡が認められるという。また、近隣地域に目を転じると、吉野川流域の川上村宮の平遺跡遺構 5005 や、五條市野原北遺跡土坑からも石錘の集中出土が確認されている。

竪穴状遺構２の出土状況についても、網紐等の植物繊維や、糸巻きの帯状の痕跡こそ遺存していないが、同様の出土例と考えられる。並んで出土した出土状況からは、石錘が網に着装された状態で投棄されていた可能性も考えられる。

ところで注目すべき点として、竪穴状遺構２の石錘集中区からは、切目石錘、打欠石錘が混在して出土している。この出土状況が網の着装状況をうかがわせるのであれば、両者はほぼ同じ機能で用いられたとみられる。

打欠石錘については従来から、編物用錘具として考える意見が根強い（渡辺 1976）。しかし、近年では、その並存関係から、切目石錘と同様に漁撈具とする意見が主流を占めつつある（久保 2003・大下 2004 a）。



丁ノ町・妙寺遺跡出土石錘（S=1:3）

このように考えると、丁ノ町・妙寺遺跡出土の石錘についても、切目石錘と打欠石錘の形態、法量が共通しており、両者は同じ漁撈具として用いられた可能性が高い。竪穴状遺構２の石錘集中区の出土状況は、こうした説を補強する良好な資料となりうるだろう。

まとめ

本稿では、丁ノ町・妙寺遺跡から出土した石錘の分析を行うとともに、その出土状況から切目石錘と打欠石錘の機能が同じ漁撈具であることを推定した。

吉野川流域、紀ノ川上・中流域の縄文時代遺跡を概観すると、橋本市市脇遺跡や、野原北遺跡、上島野遺跡、宮の平遺跡、大淀町越部ハサマ遺跡などでは、出土石器の中で石鏃とともに、石錘が一定量を占める。特に宮の平遺跡では、総出土点数で 400 点以上もの石錘が出土しており、河川付近に立地する集落に特徴的な石器組成を示す。

丁ノ町・妙寺遺跡についても、石鏃、磨石・敲石に次いで、石錘が多いことから、生業に占める漁撈の割合が大きいと判断される。

吉野川流域、紀ノ川上・中流域の河川環境と生息魚種については、津田松苗・御勢久右衛門両氏による河川環境と生息魚種の研究がある（津田・御勢 1954・大下 2004 b）。それによると、吉野川流域、紀ノ川上・中流域を代表的魚種名を冠して、「アマゴ域」・「オイカワ（ウグイ）域」・「コイ域」・「汽水域」に区分している。紀ノ川上・中流域は「コイ域」に相当し、丁ノ町・妙寺遺跡でも紀ノ川または、紀ノ川に流れこむ河川で刺網等によるコイ等の陥穽漁法が行われたと考えられる。

こうした縄文時代の網漁について、筆者に復元する手立てはないが、吉野川流域の東吉野村中出遺跡出土の切目石錘は長軸両端に施される切目のうち、一方は２カ所の切目が施されており、漁法の違いを反映していると考えられている（松田・成瀬 2002）。

一方、丁ノ町・妙寺遺跡から出土した石錘については、一端のみに切目の紐掛けをもつものも散見するが、２カ所の切目をもつものは存在せず、上流域とは様相が異なる。

生息魚種が異なる吉野川流域と、紀ノ川上・中流域との石錘の形態・法量等の差異が認められるのか、今後、周辺遺跡での漁撈具の様相が明らかになるにつれて検討すべき課題となるだろう。　（田中元浩）

※丁ノ町・妙寺遺跡の石錘については、大下明氏（雲雀丘学園中・高等学校）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、加藤雅士（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）から有益な御教示をいただいた。

参考文献

大下　明 2004 a「関西における縄紋時代後・晩期石器群の概要」『縄文時代の石器Ⅲ－関西の縄文後期・晩期』第６回関西縄文文化研究会

大下　明 2004 b「堤昭二氏収集資料に含まれる縄紋時代の石器・石製品について」『市立五條文化博物館資料目録』Ⅰ堤昭二氏収集考古資料を中心に　市立五條文化博物館

大野　薫 2003「河内湾における先史漁撈関連資料の評価」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集１

久保勝正 2003「関西地方の石錘について」『縄文時代の石器Ⅱ－関西の縄文前期・中期』第５回関西縄文文化研究会

財団法人和歌山県文化財センター 2010『西飯降Ⅱ遺跡・丁ノ町・妙寺遺跡』一般国道 24 号京奈和自動車道（紀北東道路）改築事業に伴う第１次・第２次発掘調査報告書　財団法人和歌山県文化財センター

立岡和人 2004「和歌山県における縄文時代後期・晩期の石器について」『縄文時代の石器Ⅲ－関西の縄文後期・晩期』第６回関西縄文文化研究会

津田松苗・御勢久右衛門 1954「吉野川の水生動物の生態学的研究」『奈良県綜合文化調査報告書吉野川流域』奈良県教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所『宮の平遺跡』Ⅲ　奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 89 集

松田真一・成瀬匡明 2002「東吉野村小来栖採集の縄文時代遺物について」『青稜』第 109 号　奈良県立橿原考古学研究所

渡辺誠 1973『縄文時代の漁業』雄山閣

[資料紹介]

秋月遺跡の瓦組井戸

概　要：秋月遺跡の今次調査では、鎌倉～室町時代の瓦組井戸が発見された。同時期の県内の類例では石組井戸が多く、瓦組井戸は極めて珍しい。周辺に瓦葺建物の存在を予感させる資料と考える。

幻の貞福寺

秋月遺跡は紀ノ川下流域南岸の平野東部に位置し、紀伊一宮とされる日前宮を中心とした遺跡である。今次調査では、中世の遺構では瓦組井戸、大土坑、東西大溝等がある。これらの遺構は瓦が多量に出土したことから、かつて日前宮の西に存在したとされる「貞福寺」に関わる可能性があるが、伽藍や寺域に関わる遺構は検出していない。

今次調査の西側にあたる既往調査地では、平安時代末～鎌倉時代の区画溝、井戸、柱穴等が検出され、屋敷地と推定された。また瓦が多量に出土したことから貞福寺に関係するとみられている。調査区内では瓦葺建物にともなう礎石や地業等はみられない。あるいは残存していない。当時の貞福寺にどれほどの規模を想定するかにより、これらの遺構の評価も変わるが、本稿では寺院に付属する諸施設と考えたい。

では、貞福寺の主要施設はどこに想定するべきだろうか。その手がかりの一つとして、今次調査で発見された瓦組井戸を挙げたい。

秋月遺跡の瓦組井戸

075 井戸は調査区北端に位置し、平瓦を小口積みとして井戸側とする珍しい形態である。井戸側の最上部には完形の軒丸瓦１点があり、またその下に軒平瓦数点が混じり、いずれも瓦当面を内側に向ける。堀方は長径 1.2 mの不整円形、井戸側は内径 0.5 mのほぼ円形で、検出面からの深さ１mまで瓦を使用するが、下半はほとんど結晶片岩及び円礫となる。その下は、長さ１mの木製の結桶を二段重ねて井戸側とする。結桶は幅７cm の板材を円形に並べ、外面の２箇所を紐状の有機物で束ねて結合する。結桶の上層からは須恵器甕の口縁が出土した。重複する古墳に由来する遺物と判断できるが、意図的に配置した可能性もある。井戸底は検出面から 3.1 m下（標高 0.6 m）の通水層である暗灰色粘土層上面に達する。築造時期は、井戸堀方から出土した瓦器片や、井戸側に使用された軒瓦から、鎌倉時代末から室町時代初と考えられる。

	素掘	素掘（桶）	素掘（曲物）	丸太列抜	木組	木組（曲物）	桶埋殺	曲物埋殺	石組	石組（木組）	石組（列抜）	石組（曲物）	石組（桶）	瓦組	瓦組（木組）	その他	不明	計	
縄文																		0	0
弥生前期																		0	11
弥生中期	4				1												5	10	
弥生後期																		0	
（弥生）	1																	1	
古墳前期	12			1													4	17	25
古墳中後期	5																1	6	
（古墳）	2																	2	
飛鳥・奈良	4			2	1													7	14
平安	2				2				1							1	1	7	
（古代）																		0	
鎌倉	12			1	9			1	3			6	1				4	37	248
室町	7		2		5		1		21	1	1	2	1	1				42	
天正期	1								33	1							1	36	
（中世）	12	1	1		1	1	1		23	2	1	6	2	1			2	54	
江戸	9				12				43	1		2	3	3		3	3	79	79
近現代							1							1	1			3	3
時期不明				1					2									3	3
計	71	1	3	5	31	1	3	1	126	5	2	16	7	6	1	4	21	304	
	75			5	32		4		156					7		25			

和歌山県内発見の井戸集計表
（仲原知之 2004「和歌山県内の井戸・埋桶」『紀伊考古学研究』第７号）

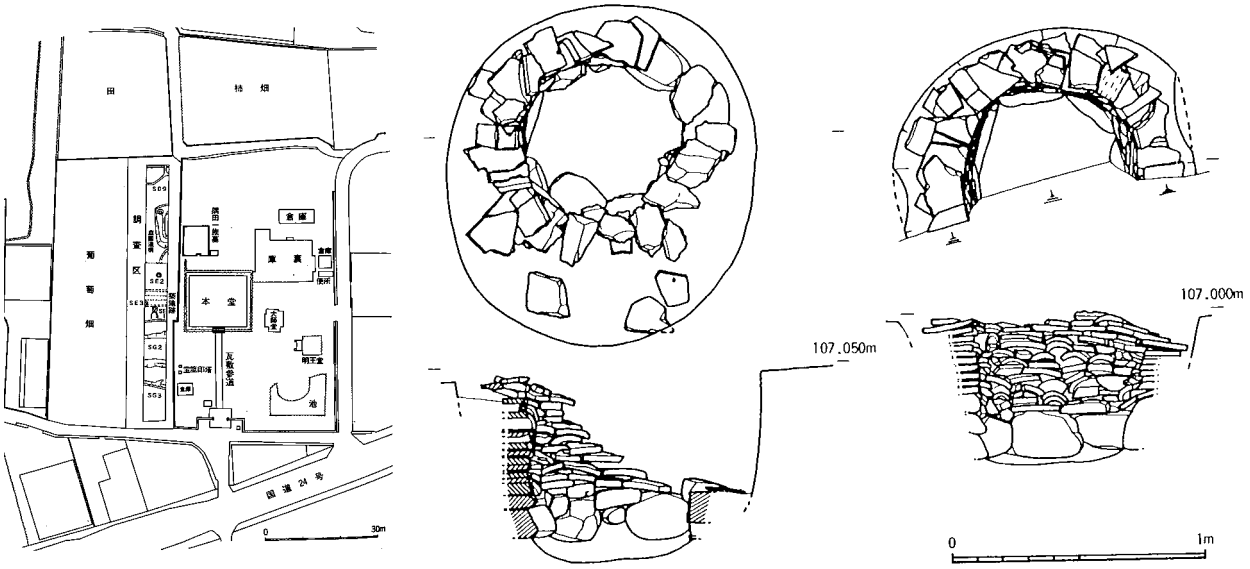
中世の瓦組井戸の類例から

県内の発掘調査で発見された井戸の集成を参照すると、中世（鎌倉時代～天正期）の井戸は根来寺遺跡等を中心に 248 例あり、うち 104 例が石組み、その他は素掘り等である。瓦組は現在のところ橋本市利生護国寺遺跡２例と秋月遺跡１例しか発見されていない。

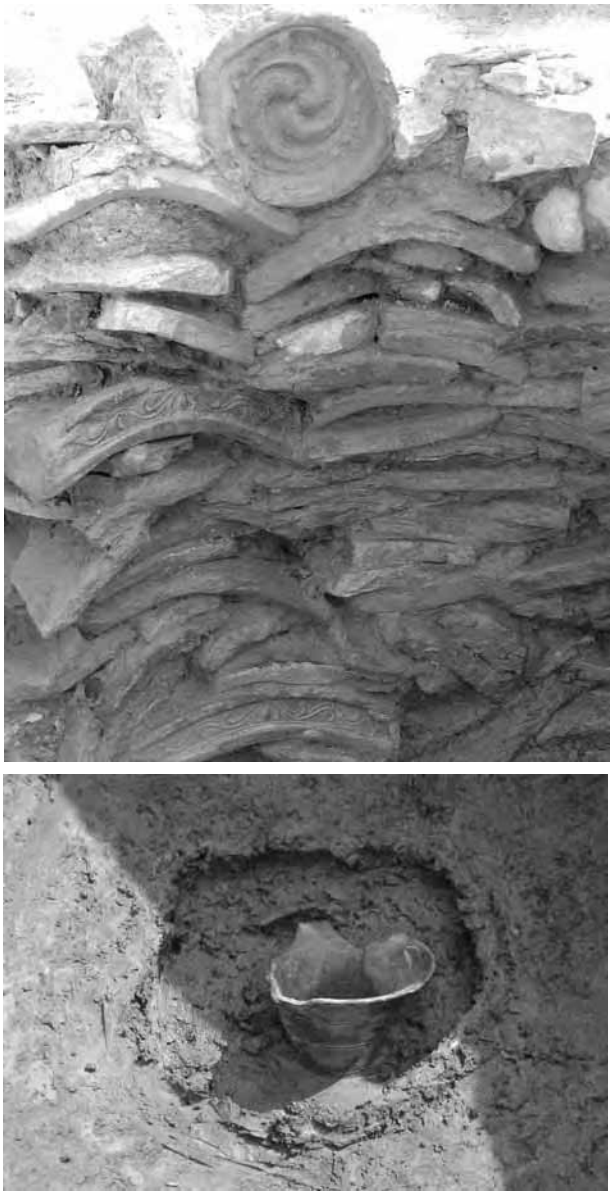
利生護国寺は行基創建と伝わる古刹で、中世隅田一族の菩提寺とされている。発掘調査では、現存する本堂に隣接して西側で２基の瓦組井戸が発見され、その南側では池状遺構が検出された。瓦組井戸は、本堂のすぐ脇という特異な立地と茶屋に関する記述から、特殊な性格を想定されている。時期・構造・規模とも秋月遺跡例と同様で、井戸側上半には瓦を小口積みし、下半は石積みとしている。また南側に池状遺構が存在する点も共通する。

この２例をもって法則性を論ずることは危ういが、鎌倉時代末～室町時代初の寺院構造の一端を窺えよう。少なくとも秋月遺跡の瓦組井戸の直近に瓦葺建物が存在した可能性を示唆すると考え得る。つまり今次調査地の北側を、貞福寺の伽藍地の推定地として提示したい。

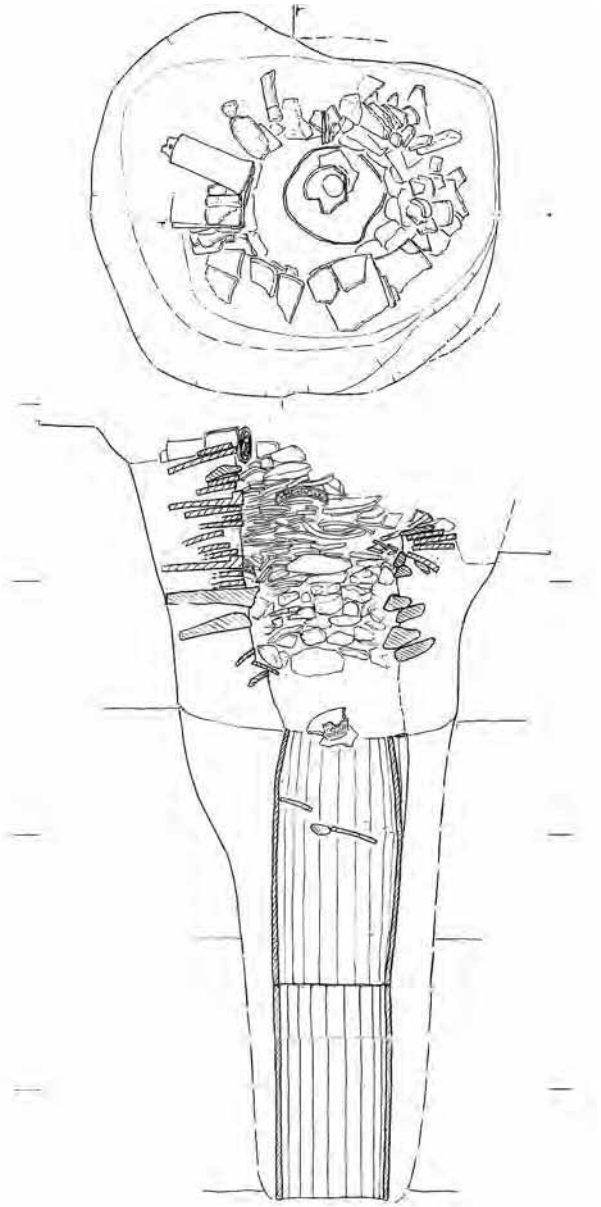
（冨永里菜）



橋本市　利生護国寺遺跡　井戸 SE 2・SE 3 遺構図　S=1:30　(橋本市遺跡調査概報 第1輯『利生護国寺』1988)



秋月遺跡　075 井戸　(上) 瓦拡大　(下) 土器と結桶



秋月遺跡　075 井戸遺構図　S=1:30

金剛三昧院台所における竈の復原考察

はじめに

現在修理工事が行われている重要文化財金剛三昧院客殿及び台所において、解体に伴う調査により、台所部分に設けられている竈の前身形態が判明した。その詳細をここに報告する。

現在の竈の状況

現在、台所には独立した六口の竈と、台所の土室[1]東側に隣接し、焚き口を土室内に設ける一口の竈が存在するが、共に躯体がレンガ積みのため近世に設けられたことが明らかである。（写真1）六口の竈はその位置などから建物建立当初には存在せず、周囲の変遷などと併せて考えると、明治後期から大正初期頃に設けられたと推定できた。しかし東側の竈に関しては、その前身及び当初形態が詳らかでなかった。というのも、山内の寺院では押し並べてこの土室東側の竈と対応する位置には竈が存在するものの、同規模の寺院ではすべて二口の竈が設けられている[2]からである。また、金剛三昧院の竈は北側に寄った不自然な位置に設けられており（写真6）、現状の竈が前身形態を踏襲していることは疑わしいが、明確な根拠がなく、前身形態を推定するに至らなかった。

高野山内の類例

ここで、高野山内の寺院における竈の形態を整理する。修理工事に関連して類例調査を行った山内の15寺院の内、該当する位置に竈が残存する例は10件あった。（表1、写真2～5）ここから、以下の共通点を抽出することが出来た。

写真1　金剛三昧院・手前が六口の竈、中央奥が台所土室

① 一体型・別棟型[3]の区別無く、二口の竈を設ける。
② 後世に改変されたものを除き、すべて焚き口は土室内にある。
③ 意匠は異なるものの、竈に接する土室の腰壁部分には共通して、土室内部（焚き口側）から窯の状態が見えるような開口部が設けられている。
④ 二口のものはすべて釜に大小の差があり、大釜は建物の正面側[4]に据えられている。
⑤ 改変のない竈は全て、表面を黒漆喰にて塗り固めている。（改変は主にレンガ積みで行う）
⑥ 竈の断面形状は、高さに多少の差異はあるものの、円弧状となる。
⑦ 平面形状は、大釜と小釜が瓢箪型に一体で形成されている。
⑧ 金剛三昧院を除き、大釜は改変されずに残存した。

復原考察

さて、今回の修理工事に伴う調査により、図1に示す痕跡を確認することが出来た。そしてこれらの痕跡を精査し、前段で述べた高野山内の類例を参考にして、図2に示す復原案を想定した。

表1　高野山内の寺院における台所の竈形態

寺院名	建立年代	建物形式	台所の位置	窯の大小の別	古式を残す竈		改変を受けた竈		総竈口数	大釜位置	竈の形状	〔改変〕
金剛三昧院	江戸時代前期	別棟型	右側	—	0	—	1	(大釜)	1	—	—	〔レンガ積〕
不動院	安土･桃山時代か	一体型	右側	あり	1	(大釜)	1	(小釜)	2	建物正面側	黒漆喰円錐状	〔レンガ積〕
親王院	文政10年(1827)	一体型	右側	あり	1	(大釜)	1	(小釜)	2	建物正面側	黒漆喰円弧状	〔レンガ積〕
清浄心院	万延元年(1860)以降	別棟型	右側	あり	2	(大釜･小釜)	0	—	2	建物正面側	黒漆喰円弧状	—
金剛峯寺	文久2年(1862)	別棟型	右側	なし	0	—	3	—	3	—	—	〔タイル張〕
龍光院	明治元年(1868)か	別棟型	左側	あり	2	(大釜･小釜)	0	—	2	建物正面側	黒漆喰円弧状	—
北室院	明治期か	一体型	左側	あり	2	(大釜･小釜)	0	—	2	建物正面側	黒漆喰円弧状	—

10件の内復原考察が可能であった6件を抽出　＊玄関に向かって　＊大釜・小釜の区別は相互の比較であり、具体的な容量等を表すものではない。

網掛けは共通項を示す

写真２　親王院

写真３　清浄心院

写真４　龍光院

写真５　北室院

写真６　金剛三昧院現状の竈（東より見る）

以下に復原考察に際して用いた根拠や手順を記す。

・台所土室南東柱東面に付着していた「土」及び下部の腐れ状況から、竈は塗り籠めで断面形状は円弧に近い形状であったと判断した[5]。

・床下に残る石積みと土盛りから、大釜は土室に向かって左側（建物正面側）に据えられ、竈の平面形状は円形であったと判断した。

・類例では大釜はすべて改変されずに残存していたことから、大釜の残存率は高いと言える。よって金剛三昧院においても大釜を再用していると推測した。

・小釜の配置が想定される位置には、手掛かりとなる痕跡を発見出来なかった。このため、小釜の径及び詳細は不明である。復原考察では、金剛三昧院と共通点が多い清浄心院の大釜と小釜の比率（４：３）を参考に小釜の径を想定した。

・土室南東柱の東面では、床板が当初根太（と推定される）のホゾ穴より低くなっている。また、台所部分は不陸が著しく、床組も近年に組み替えられている。よって、復原考察では床板レベルは柱に残る根太のホゾ穴位置を基準として設定した。

・竈に接する土室の腰壁部分は、現在は土壁の上に板

写真７　前身竈痕跡

写真８　床下痕跡（土室内部より東を見る）

張りであるが、周囲との取り合いから、これらはレンガ積みの竈と同時期の施工と判断出来る。柱及び梁の内側には目立った痕跡が無く、全体に黒変していることから、腰壁部分は当初は開放であったと推測した。また、土室南東柱の竈痕跡上端より 2.5 センチメートル上方に、無目及び幕板の仕口と推定出来る仕口が残されていることから、腰壁部分を無目及び幕板で上下に間仕切り、下部が竈及び焚き口、上部が開放であったと推定した。

まとめ

以上より、台所土室に東接する竈の当初形式の一部分が明らかとなった。しかし、小釜に関する直接的資料が得られていないなど、依然として不明な箇所も存在する。当該部分の床組は当工事では解体を行わない範囲であり、今以上の知見を得るためには、当工事の解体範囲を超える解体・調査が必要になると考えられる。以上諸々の状況を勘案すると、今回の工事で竈を復原することは困難なこともあり、この復原考察によって竈を前身形態に復原することはない。この復原考察は、あくまで今回の工事に伴う調査により得られた知見を取り纏めたものである。　（結城啓司）

注　記

1　腰高より上を土壁塗りとした、約畳一畳大の煙道

2　金剛峯寺大主殿〔文久 2 年 (1862)〕には三口の竈が設けられているが、規模の大きさと総本山であることの特殊性から、今回参照とする類例からは除外した。

3　一体型は客殿と台所が同一の建物から成る形式。これに対して、金剛三昧院のように客殿と台所が別棟となる形式を別棟型とする。基本的には寺格の高い寺院は別棟型となる傾向がある。なお、「一体型」・「別棟型」の用語及び定義は『藤川昌樹「高野山の山内空間と建築」』によった。

4　「建物の正面側」としたのは、山内の寺院には玄関を中心に左側を客殿、右側を台所とするタイプ（金剛三昧院、金剛峯寺など）と左側を台所、右側を客殿とするタイプ（龍光院、北室院）があるため。これらは一体型、別棟型の区別なく、平面形式において玄関部分を中心軸として線対称となる。

5　この柱を含む土室の柱 3 本（北東柱は石柱）は、全て足元が根継ぎされおり、痕跡は根継ぎ材に残っていた。しかし、根継ぎ材の風化や腐食、損傷の程度を見ると、他の当初材と比べて差異を感じ取れなかった。また、土室上部には現状とは異なる勾配の垂木が取り付いていた痕跡も確認出来ること、そして客殿及び台所は前身建物を踏襲して建築されていることなどを総合的に判断して、土室は前身遺構のものであり、柱の根継ぎは現在の客殿及び台所が建築された時に為されたと判断した。よって、この痕跡から復原できる竈は、当初のものと推定出来る。

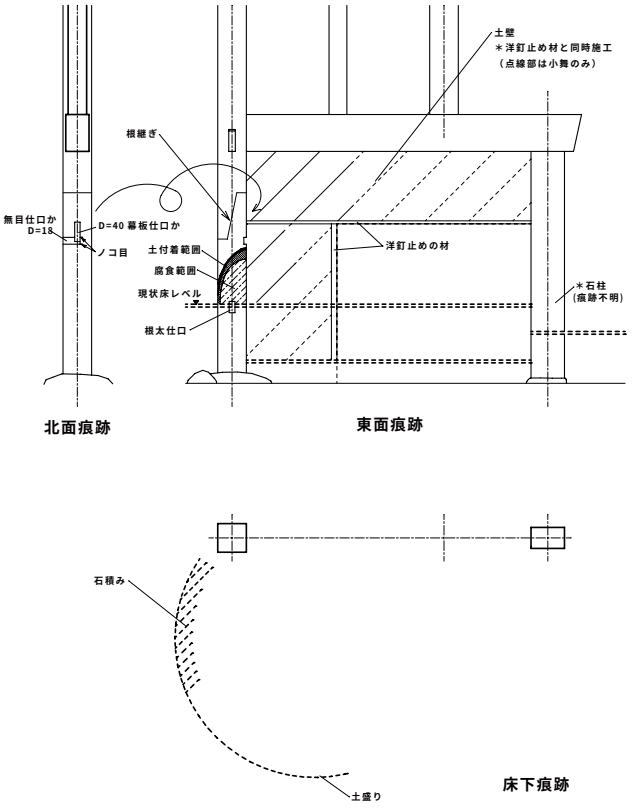


図 1　台所土室東側竈痕跡図

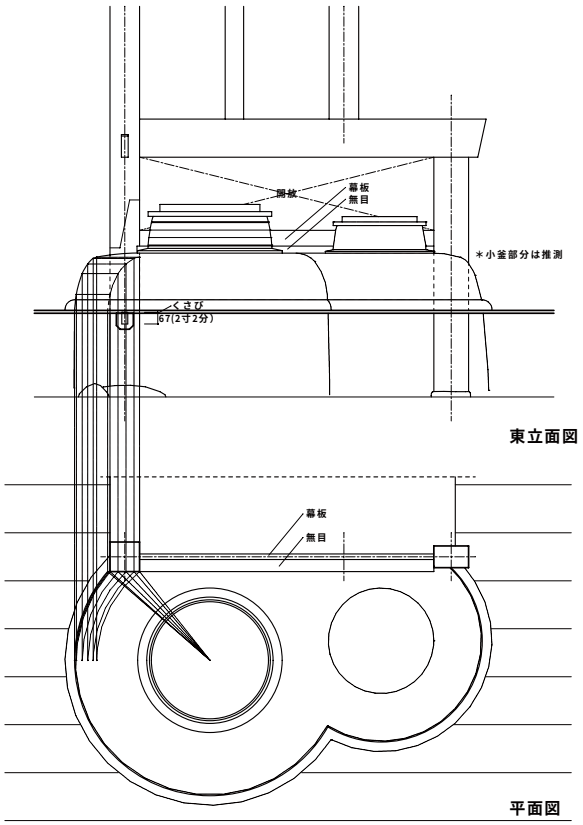


図 2　台所土室東側竈復原図

唐花立涌の襖について

はじめに

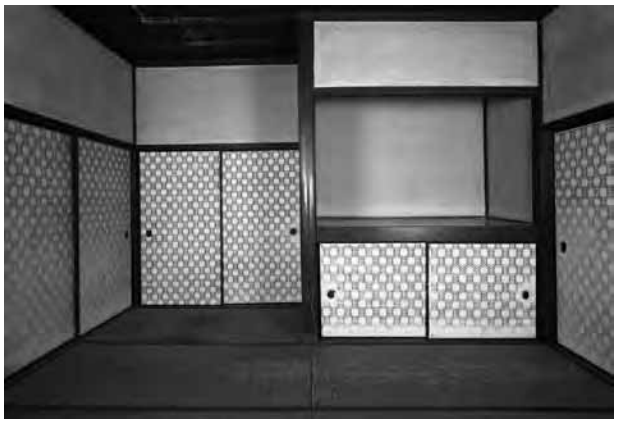
旧中筋家では大小合わせると主屋、表門で計 134 枚もの建具に襖紙が使われている。それらの建具には部屋毎に様々な文様の唐紙が使われているが、その中で最も特徴的なのが「唐花立涌」と呼ばれる唐草の連続文様であり、胡粉を塗った白色の地に青色の唐草文様を施してある。この文様の本紙は多くの部屋で使われており、特に主屋の賓客を迎える場所であるオオゲンカンで使われていたことから、特別な文様であるのだろうと以前から注目してきた。そこで本紙の解体調査に伴い、改めて唐花立涌についての調査を行った。

また、この唐花立涌文様が使われている建物が同じ和歌山県内で見つかった。それらについて類例調査を行ったので、旧中筋家の文様と比較しながら報告する。

旧中筋家の唐花立涌

今回の保存修理工事の中で、修理が必要な襖について解体を進めていくと、現状の本紙の下に残る旧本紙やその断片からも唐花立涌が確認出来た。このことから、当初は現状よりも多くの部屋で唐花立涌文様の襖が使われていたことが分かった。

また工事中に、主屋 2 階の箱階段の引出しから、本紙の切れ端や余りが多数見つかった。この中にも唐花立涌文様の唐紙が多数みつかり、さらにその文様が、花の大きさや間隔、色味の違いなどによって 5 種に分類出来ることが分かった。そこでそれらの文様を分類し、現状の本紙や旧本紙にあてはめてみることにした。



旧中筋家オオゲンカンの唐花立涌（修理前）

まず、文様が濃紺色で茎が細く、全体的に繊細なものが二種類あり、そのうち唐紙の端の枠線が細く連続しているものをＡ、太くて途切れているものをＢとした。次に、前記の二種に比べて文様の青みが強く、茎が太く全体的に荒いもの二種類のうち、枠線が途切れているものをＣ、連続しているものをＤとした。Ｄは文様部分に雲母の粉が混ざっており、光に当たるとキラキラしている。そして文様が最も鮮やかな青色で茎が太く、全体的に粗いものをＥとした。なおＡが花の大きさ、間隔ともに最も小さく、Ｅが最も大きい。

今回の調査の結果、本紙の前後関係などから当初頃と推定した本紙に使われていた唐花立涌は、ＡとＢであった。Ｃ・Ｄ・Ｅについては後の張り替えの際に購入したものと思われ、特にＥについては反故紙に中筋牧場の通い帳が使われていた。中筋牧場は明治時代に開業したことから、このＥは明治時代後期以降に張られたことが分かる。

以上のことから、当初は濃紺色で花が小さく繊細であった文様が、時代を経て青みを増して大きくなり、仕上がりの荒いものへと変化したことが推測出来る。

類例との比較

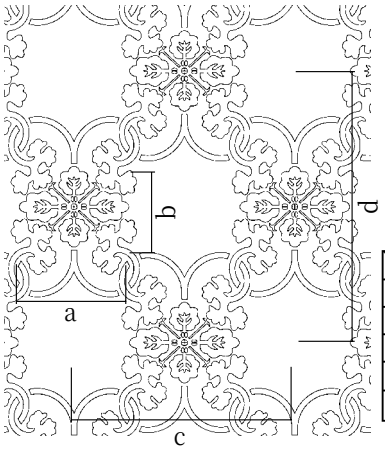
ここで、県内の建物で見つかった唐花立涌文様について、旧中筋家との比較を行った。

①粉河寺本坊（紀の川市粉河 / 江戸時代末期）

玄関と座敷の襖に使われている。文様の色は旧中筋家では見られない水色である。花の形はＤに、茎の太さはＥに似ている。この本紙は近年貼り替えられたものであるが、以前も同様の文様が使われていた。

②十禅律院庫裡（紀の川市粉河 / 天保年間）

玄関、内廊下、入側、座敷の襖、壁、天井に使われ



	a	b	c	d
A	56	41	115	142
B	56	42	117	144
C	56	43	117	144
D	57	42	117	143
E	57	43	118	144

（単位：mm）

唐花立涌の分類別寸法

ている。この建物は県指定文化財であり、唐紙見積図が附指定されている。これは施工に必要な唐紙の枚数を平面図に書き込んだものであり、文様名は書かれていないものの、当初から唐紙が張られていたことが分かる。色や茎の太さはＢ・Ｃに似ている。旧中筋家と同様に劣化が激しく退色している。

③貴志家住宅座敷（和歌山市梅原 / 江戸時代末期）

座敷とスキヤの天井に使われている。Ａ・ＢとＣ・Ｄのどちらにも似ない中間の色をしており、茎の太さはＥに似る。この本紙は 20 年程前に張り替えた印刷のもので、旧本紙も同じ文様の唐紙が使われていた。

④平松家住宅（和歌山市川辺 / 江戸時代末期か）

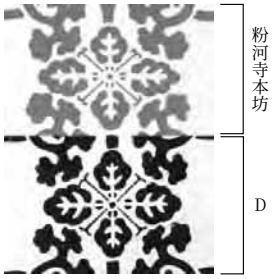
玄関北隣の三畳の部屋の襖、地袋の小襖、地袋上の貼壁に唐花立涌文様の唐紙が使われている。大版の襖については色、茎の太さ共にＤに似ている。またこの西端の襖の足元部分は補修の為か張り重ねられており、その本紙についてはＣに似ている。地袋の小襖については文様の間隔が旧中筋家や他の類例よりも大きく、色は紺色で茎の太さはＤ・Ｅに似ている。なおこの北隣の七畳半の部屋にある戸襖の現本紙の下にも唐花立涌文様が確認出来た。

まとめ

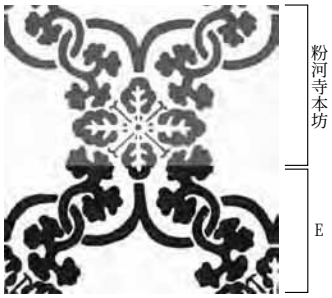
このように、旧中筋家住宅以外でもこの唐花立涌文様が使われている建物が和歌山県内にあることから、和歌山ではこの文様が好んで使われていた時期があったことが推測出来る。そして旧中筋家を含め、それらの建物が紀州藩とのつながりを持つことも興味深い。

また、今回の調査では、唐花立涌の唐紙についての入手経路や生産地は分からなかった。現在も唐紙を製作している京都の唐紙屋「唐長」にも版木はなく、今回の旧中筋家の修理工事では特注で版木を起こし、唐紙を製作した。ただ、幕末から明治にかけて駐日英国公使であったハリー・スミス・パークス卿が明治 4 年に英国帝国議会に提出した、和紙とその加工品のコレクションの中にこの唐花立涌文様の唐紙があることが分かった。これは明治 3 年に長崎で収集されたものとあり、入手経路などは分からない。しかし、旧中筋家で使われている唐花立涌が長崎で収集されていることが判明したことで、少なくとも和歌山独自の文様ではなく、江戸時代末期から明治頃に流通していた文様であったことが考えられる。　（増野真衣）

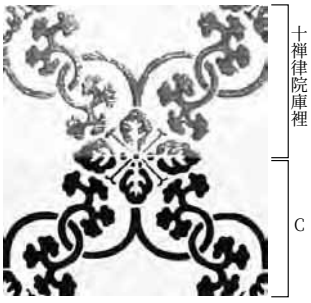
十禅律院庫裡の唐花立涌



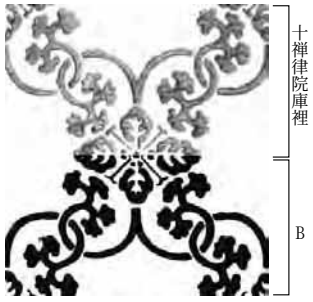
粉河寺本坊とＤの比較



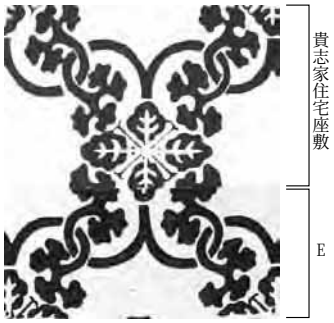
粉河寺本坊とＥの比較



十禅律院庫裡とＣの比較

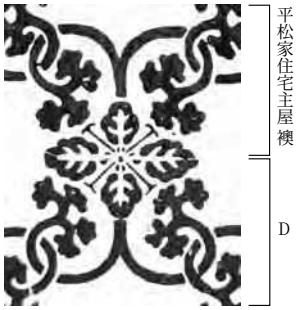


十禅律院庫裡とＢの比較



貴志家住宅座敷とＥの比較

平松家補修本紙とＣの比較



平松家の大版襖とＤの比較

平成21年度の普及活動

速 報 展　「紀州の歩み」
報告会等　「地宝のひびき」
　　「紀ノ川流域の縄文文化」
　　「中世「重行」の屋敷地」
　　「北山廃寺、北山三嶋遺跡発掘調査の発 掘調査」
見 学 会　「歩いて知るきのくに歴史探訪」
発掘調査現地説明会等　水軒堤防、重行遺跡、秋月遺跡、中飯降遺跡、北山廃寺、北山三嶋遺跡
修理現場見学会　「見て知る伝統技術」
そ の 他　「関西・考古学の日」協賛に伴う事業
　　「移動式展示ケースの購入」

平成21年度普及活動の概要

当センターの実施した調査の成果を地域に還元し、歴史と文化財に対する理解と認識を深めることを目的に、速報展、報告会、現地説明会等を実施した。事業は、埋蔵文化財に関するもの12件、文化財建造物に関するもの１件、双方にまたがるもの１件である。

また、当センターの情報誌『風車』を年４回、刊行している。

これら以外に、保管遺物・記録資料の貸し出し・掲載等についても、随時、依頼に応じている。

埋蔵文化財に関する普及事業

展示１件、遺跡見学会１件、シンポジウム及び講演会等４件、現地説明会等５件を実施した。これら以外に、「関西・考古学の日」協賛事業として、スタンプラリー等も実施した。また、現地説明会等で遺物を効果的に展示するため、移動式展示ケースを購入した。

なお、事業の一部は、埋蔵文化財保存活用整備事業として、国および県からの補助金の交付を受けて実施している。

①「紀州の歩み」

②「地宝のひびき」

速報展「紀州の歩み」

平成21年５月１日から31日まで、和歌山県民文化会館ロビーを会場として実施した。平成20年度の事業の成果として、縄文時代の大型竪穴建物が検出され、全国的にも注目を集めているかつらぎ町中飯降遺跡の発掘調査成果をはじめ、文化財建造物と埋蔵文化財の双方の調査が行われた、高野町金剛三昧院の保存修理事業の成果等を展示した。

今年度は、会場がロビーの一角という位置のためか、別のイベントに来館された方が足をとめ、展示を見学して帰る、といった「ついで見学」ともいうべき現象が起きた。その結果、例年よりもかなり多くの方々に展示を見ていただいた。展示会場の選定という面で、今後、検討すべき課題を得たといえよう。　…①

「地宝のひびき」

平成21年６月28日に和歌山県立図書館にて開催した。帝塚山大学人文科学部教授の森郁夫氏に「天武・持統政権と紀伊の古代寺院」と題した記念講演を依頼した。また、７名の発表者が県内の主要な発掘調査成果について発表した。

③歩いて知るきのくに歴史探訪

④「紀ノ川流域の縄文文化」

⑤「中世「重行」の屋敷地」

参加者が総計で 100 名を超え、会場がほぼ満席になった。当日資料集も好評であり、この種の事業に対する人々の関心の高さ、需要の大きさを示唆するものとなった。 …②

「歩いて知るきのくに歴史探訪」

平成 21 年 10 月 24 日に「高野山再発見」をテーマとして高野山内にて開催した。高野山における埋蔵文化財の調査成果をもとに作成したマップをもとに、説明を行いながら高野山内をめぐった。

参加者 53 名と当センターが過去に実施してきた見学会の中でも多くの参加者を得た部類に入る。文化財建造物、美術工芸品等の目に見える文化財が多い地域では、地中に存在する埋蔵文化財の存在が見落とされがちだが、今回の事業で、調査成果への関心を高めることができたのではないだろうか。 …③

「紀ノ川流域の縄文文化」

平成 21 年 11 月 7 日に、かつらぎ総合文化会館にて開催した。現在、全国的にも注目を浴びている紀ノ川流域の縄文時代にスポットを当て、公開シンポジウムとして実施した。基調講演を千葉市立加曾利貝塚博物館副館長の村田六郎太氏に依頼するとともに、4 名が発表を行った。発表後、講演者、発表者を含む 7 名でシンポジウムを実施した。

中飯降遺跡の発掘調査成果を発端とした普及事業に関しては、昨年度にも幾度か実施している。それにもかかわらず、当日は、地元の方々を中心に 100 名以上の参加者があった。中飯降遺跡の大型竪穴建物という「新発見」に対する興味・関心が、地域の「埋蔵文化財」全般に対する興味へと広がりを見せつつあるようである。 …④

「中世「重行」の屋敷地」

平成 21 年 12 月 19 日に、打田生涯学習センターにて開催した。中世の屋敷跡が良好な状態で検出された紀の川市重行遺跡とその周辺の歴史的環境をテーマに「京奈和報告会」として実施した。

当センター職員が、重行遺跡の発掘調査成果の報告を行った。また、当該地域の中世史に詳しい高野山大学文学部教授の山陰加春夫氏による、文献史学からみた中世社会についての講演を実施した。 …⑤

「北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査」

平成 22 年 3 月 6 日に、貴志川生涯学習センターにて開催した。中山間総合整備事業に伴って実施してい

⑥「北山廃寺、北山三嶋遺跡発掘調査の発掘調査」

⑦秋月遺跡

埋蔵文化財課の実施した主要な普及活動

活動名称	開催日時・期間	場所
紀州の歩み	平成21年5月1日～5月31日	和歌山県民文化会館
地宝のひびき―和歌山県内文化財調査報告会―	平成21年6月28日	和歌山県立図書館（きのくに志学館）
水軒堤防現地公開	平成21年7月3･4日	和歌山市西浜
重行遺跡現地公開	平成21年8月27～29、31日	紀の川市重行
秋月遺跡現地説明会	平成21年9月18･19日	和歌山市太田
中飯降遺跡現地公開	平成21年10月8日	かつらぎ町中飯降
北山廃寺、北山三嶋遺跡現地公開	平成21年10月17日	紀の川市貴志川町
歩いて知るきのくに歴史探訪～高野山再発見～	平成21年10月24日	高野町高野山内
公開シンポジウム「紀ノ川流域の縄文文化」	平成21年11月7日	かつらぎ総合文化会館「あじさいホール」
京奈和報告会「中世「重行」の屋敷地―重行遺跡の発掘調査成果―」	平成21年12月19日	打田生涯学習センター
北山廃寺、北山三嶋遺跡発掘調査報告会「北山廃寺、北山三嶋遺跡発掘調査の発掘調査」	平成22年3月6日	貴志川生涯学習センター

る北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査成果を速報的に地域住民に対して速報的に公表する「北山廃寺、北山三嶋遺跡発掘調査報告会」として実施した。　…⑥

発掘調査現地説明会等

当センターが受託した発掘調査業務のうち、５遺跡にて各１回ずつ実施した。

発掘調査中の遺跡を公開するという趣旨は同じだが、対象とする参加者層や調査状況に応じて、方法の異なる「現地説明会」と「現地公開」の２者を使い分けている。

「現地説明会」は、時間を区切り、一斉に参加者を現地に案内し、説明を行うものである。いっぽう、「現地公開」は、主として調査地の地元住民を対象とし、公開時間を広くとり、来跡した参加者に随時、案内・説明を行うものである。

水軒堤防　7月3・4日
重行遺跡　8月27～29、31日
秋月遺跡　9月18･19日　…⑦
中飯降遺跡　10月　8日
北山廃寺、北山三嶋遺跡　10月17日　…⑧

「移動式展示ケースの購入」

現地説明会やシンポジウムなどで関連展示を行う機会が多くあり、また、来場者等から遺物展示を望む声がしばしば、あがっていた。しかし、当センターには、展示ケースが無いため、従来は、オープン展示にならざるを得なかった。こうした状況では、遺物管理等の問題が発生することから、現地に展示ケースのない場所では、十分な展示活動を行えなかった。

そこで、施設整備の一環として、安価かつ持ち運び可能なサイズである移動式展示ケースを購入し、現地説明会等での遺物展示に活用した。　…⑨

その他

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックの実施した、「関西･考古学の日」に関連して、スタンプラリー等の各イベントに協賛している。

（岩井顕彦）

⑧北山廃寺、北山三嶋遺跡

⑨展示ケースの活用状況

文化財建造物に関する普及事業

平成21年度は職員が常駐する文化財建造物保存修理現場が、旧中筋家住宅と金剛三昧院の２つあり、適時求めに応じ、現場見学会の開催に協力した。見学会の参加者は一般の方々から、建築の専門家まで多様であったが、日常見る機会のない修理現場を見ていただき、文化財保存修復について理解を深めていただいたことと思う。

「見て知る伝統技術」

財団法人和歌山県文化財保護協会が主管となり、毎年行っている文化財公開事業で、県教育委員会、高野町教育委員会と当センターの共催で、21年度は重要文化財金剛三昧院修理現場で８月22日に実施した。

今回は現在保存修理事業を実施している重要文化財金剛三昧院客殿および台所の工事や国宝の多宝塔を見学していただいたが、軸部の補修が完了し本来の格式高い空間構成が再現されつつある客殿とともに、修理中も竈に火がくべられ続け、生活感あふれる台所に触れて貰うことで、より身近な存在として文化財保存修理事業を感じて貰うことが出来た。　…⑩

修理現場見学会開催の協力

・旧中筋家住宅

旧中筋家住宅は21年度が保存修理の最終年度であったからか、見学会開催依頼は多く、10回に及んだ。6月28日には地元の禰宜自治会主催の見学会があり、地元住民を中心に50人を超える方々をご案内した。中筋家は翌年度からの公開が予定されており、地元の文化遺産として関心が高かった。しかし主屋は既に内部土壁の仕上げ塗りや、障子張りが完了しており、汚損事故等の懸念から、残念ながら内部は土間や縁側から見ていただくに止まった。11月29日は大阪住まいのミュージアムのボランティアで来館者に案内をしている「町家衆」の方々の研修会があった。専門的な研修であったため、内部に至るまでご案内したが、大変熱心に見学され、質問をする方も多く見受けられた。

・金剛三昧院

金剛三昧院は世界遺産に登録されている高野山に在し、国宝建物等が多数残されていることもあり、文化財建造物の修復に携わる技術者の研修が行われた他、文化庁の選定保存技術保存団体に新たに認定された日本伝統建築技術保存会の記念大会に伴う見学会が開催された。また地元高野町の小学校の課外授業からアメリカの大学の研究者まで、文字通り多岐に渡る方々を対象として修理現場における解説をおこなった。現在小学校の国語の教科書には和釘に関する話題が掲載されており、矢継ぎ早に繰り出される子どもたちの質問に応えることで、授業で習った知識を実際に触れて理解する喜びを共有することができた。また、中世史など異分野の専門家との意見を交換することは大いに刺激的であり、修理現場の公開を通して視野を広げる契機がもたらされることを改めて認識した。

・鈴木家住宅

地元有田川町民を対象とした現場見学会であったが、町外からも多くの方に参加いただいた。今では珍しくなってしまった茅葺屋根の葺き替え作業を間近に見学することや、地元生石高原での茅材調達の取り組みの紹介を通して、伝統的な工法の素晴らしさを体感して貰うとともに、それらを伝承していく困難さにも触れていただくことが出来た。　…⑪

（多井忠嗣・御船達雄）

⑩「見て知る伝統技術」（金剛三昧院）

⑪ 鈴木家住宅の見学会

(財)和歌山県文化財センター平成 21(2009)年度概要

Ⅰ　受託事業

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	12 件
埋蔵文化財遺物整理等受託業務	4 件
文化財建造物保存修理設計監理業務等	11 件

Ⅱ　理事会・調査委員会・会議等

理事会・評議員会

理事会・評議員会	21.05.29	アバローム紀の国
理事会・評議員会	22.03.29	アバローム紀の国

調査委員会

平成 21 年度　第 1 回調査委員会	21.09.11・24	秋月遺跡、北山廃寺、北山三嶋遺跡 京奈和自動車道 (紀北東道路) 出土遺物整理
平成 21 年度　第 1 回水軒堤防調査委員会	21.06.24･25･27	
平成 21 年度　第 2 回水軒堤防調査委員会	22.01.29	
平成 21 年度　第 3 回水軒堤防調査委員会	22.03.24	

現地調査指導

工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長	21.06.26	水軒堤防

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

平成 21 年度第 1 回近畿地区ＯＡ委員会	21.06.05	主催：(財) 大阪市文化財協会
平成 21 年度第 1 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	21.06.11･12	主催：(財) 北海道文化財センター
平成 21 年度第 1 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議	21.07.10	主催：(財) 元興寺文化財研究所
第 15 回近畿ブロック埋蔵文化財研修会	21.11.02	主催：(財) 京都市埋蔵文化財研究所
平成 21 年度第 2 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議	21.11.06	主催：(財) 向日市文化財センター
平成 21 年度第 1 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会議	21.11.26･27	主催：(財) 群馬県埋蔵文化財センター
平成 21 年度第 2 回近畿地区ＯＡ委員会	21.12.11	主催：(財) 大阪市文化財協会
平成 21 年度第 2 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議	22.02.05	主催：(財) 和歌山県文化財センター
平成 21 年度第 2 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議	22.02.19	主催：(財) 大阪府文化財センター

埋蔵文化財課関係

「埋蔵文化財の資格制度を考える」関西シンポジウム	21.07.10	主催：(社) 日本考古学協会
平成 21 年度　和歌山県記念物・埋蔵文化財担当者会議	21.12.22	主催：和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課
「関西・考古学の日」記念講演	21.10.10	主催：「関西・考古学の日」実行委員会

文化財建造物課関係

平成 21 年度重要文化財建造物保存修理事業等監督者会議	21.04.13	主催：文化庁
平成 21 年度文化財建造物保存事業幹部技術者研修会	21.04.14	主催：(財) 文化財建造物保存技術協会
平成 21 年度文化財建造物保存事業技術者養成研修	21.05.11-22, 06.22-27, 07.27-08.07, 09.28-10.02	主催：(財) 文化財建造物保存技術協会
平成 21 年度文化財建造物保存修理関係者等連絡協議会	21.10.13	主催：文化庁
平成 21 年度文化財建造物保存事業主任技術者研修	21.10.14-15	主催：(公財) 文化財建造物保存技術協会

委員委嘱

村田　弘	第 1 回紀の川市文化財保護委員会	21.05.11	於：紀の川市歴史民俗資料館
村田　弘	名手本陣整備委員会	21.11.16-23.09.30	
鳴海　祥博	海南市文化財保護審議会委員	21.06.01-22.03.31	
鳴海　祥博	旧中筋家住宅展示コンペ審査会	21.08.31	主催：和歌山市
山本　新平	和歌山県近代和風建築総合調査委員会	21.12.10	主催：和歌山県
鳴海　祥博	丹生都比売神社境内保存管理計画策定委員会	22.02.10	主催：丹生都比売神社

Ⅲ　講師派遣・執筆など

講師派遣等

［埋蔵文化財課関係］

冨永　里菜　考古学研究会関西例会第 158 回研究会「中飯降遺跡の調査―縄文時代の大型竪穴建物を中心に―」
21.05.23　於 : 大阪市弁天町市民学習センター　（開催中止）

村田　弘　「紀伊万葉の前史－紀ノ川筋の歴史と文化遺跡－」　21.11.07　於 : 和歌山大学生涯学習教育研究センター

岩井　顕彦　(社) 和歌山県文化財研究会平成 21 年度第 3 回文化財講座「鉄の時代―王権の鉄・民衆の鉄・紀伊の鉄―」
21.12.05　於 : 和歌山県立近代美術館

冨永　里菜　関西縄文文化研究会研究集会「中飯降遺跡の調査－縄文時代の大型竪穴建物－」
21.12.12　於 : 滋賀県立安土城考古博物館

冨永　里菜　考古学研究会関西例会第 158 回・第 162 回研究会「中飯降遺跡の調査―縄文時代の大型竪穴建物を中心に―」
22.01.30　於：奈良市男女共同参画センター

田中　元浩　大阪府立弥生文化博物館弥生時代入門講座「土器から見る弥生時代のおわり」
22.03.13　於 : 大阪府立弥生文化博物館

［文化財建造物課関係］

多井　忠嗣　重要文化財鈴木家住宅保存修理現場見学会　21.05.09　於：鈴木家住宅

鳴海　祥博　高野町子ども世界遺産くらぶ金剛三昧院見学　21.05.20　於：金剛三昧院

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（禰宜自治会）　21.05.26　於：旧中筋家住宅

鳴海　祥博・下津健太朗　（社）和歌山県文化財研究会平成 21 年度第 1 回文化財めぐり
21.06.15　於：京都御所、西本願寺、二条城

鳴海　祥博　高野山大学図書館平成 21 年度第 1 回文化講座「高野山金剛三昧院の解体修理から見えてきたもの」
21.06.25　於：金剛三昧院

多井　忠嗣　（社）和歌山県文化財研究会平成21年度第2回文化財めぐり　21.07.18　於：福勝寺、地蔵峰寺、善福院

鳴海　祥博　平成 21 年度国際交流基金文化協力（助成）プログラム「ホイアン町並み保存プロジェクトⅡ」
21.08.09-17　於：ベトナム社会主義共和国

多井　忠嗣　海南歴史散歩講座「建造物から見た海南」　21.09.19, 10.17　於：海南市中央公民館

鳴海　祥博　県退職公務員連盟和歌山支部「紀州東照宮・和歌浦天満宮・高津子山展望台を文化財専門家と散策しよう」
21.10.06　於：和歌浦

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（紀の川水土里ウォーク）　21.10.10　於：旧中筋家住宅

鳴海　祥博　平成 21 年度文化財建造物保存事業中堅技術者研修会「台所部分の復原検討と、活用計画の立案について」
21.10.26-28　於：金剛三昧院

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（和歌山市立博物館史跡散策）　21.10.31　於：旧中筋家住宅

鳴海　祥博　高野山大学図書館平成 21 年度第 2 回文化講座「不動堂について」
21.11.12　於：高野山大学

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（(株)木地由ナショナル建材社）　21.11.14　於：旧中筋家住宅

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（川辺歴史研究会）　21.11.23　於：旧中筋家住宅

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（和歌山県左官工業協同組合）　21.11.28　於：旧中筋家住宅

御船　達雄　旧中筋家住宅修理現場見学（大阪市立住まいのミュージアム）　21.11.29　於：旧中筋家住宅

日本伝統建築技術保存会大会に伴う修理現場説明　21.11.30　於：金剛三昧院

多井　忠嗣　海南市教育委員会ふるさと下津の歴史講座「歴史的建造物から見た下津」
22.01.18, 02.01　於：海南市役所下津行政局

多井　忠嗣　有田川町教育委員会いにしえの有田歴史講座「有田川町の文化財建造物と保存修理」
21.03.06　於：歓喜寺

執筆等

小関　洋治	「若手技師４人が最前線から」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.04.07
［埋蔵文化財課］				
冨永　里菜	「遺跡と発掘調査」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.04.14
田中　元浩	「現場での発掘、その後」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.04.21
冨永　里菜	「発掘調査の方法」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.04.28
田中　元浩	「遺物を洗う」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.05.12
冨永　里菜	「発掘調査―土を掘ってわかること―」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.05.19
田中　元浩	「土器の復元と接合」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.05.26
冨永　里菜	「発掘調査―遺構の記録をとる―」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.07.14

田中　元浩	「遺構・遺物の実測図に込めた熱き思い」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.07.21
冨永　里菜	「発掘調査－遺物の記録－」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.08.04
田中　元浩	「弥生人の描いた「鹿の絵」をめぐって（その１）」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.08.11
田中　元浩	「弥生人の描いた「鹿の絵」をめぐって（その２）」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.08.18
冨永　里菜	「縄文時代の巨大な建物の発見」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.08.25

［文化財建造物課関係］

下津　健太朗	「基礎が伝える歴史～建物も人間も基礎が大切～」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.06.02
結城　啓司	「大工さんの仕事～文化財建造物の修理～」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.06.09
下津　健太朗	「屋根瓦がもの語る歴史－いつまでもかわらないもの－」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.06.16
結城　啓司	「高野山の瓦屋根」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.06.23
下津　健太朗	「木と建物～木に学ぶ～」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.06.30
結城　啓司	「木の表面を見ると時代が判る !?」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.07.07
結城　啓司	「天井から判る部屋の格式」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.09.01
結城　啓司	「建具の話」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.09.08
下津　健太朗	「表具のはなし－表具と空間－」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.09.15
増野　真衣	「残していきたい稲わらの畳」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.09.29
下津　健太朗	「塗装のはなし～木目塗（もくめぬ）りの和と洋～」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.10.06
下津　健太朗	「文化財建造物における構造補強の将来」	『文化財のゲンバから』	産経新聞	21.10.20

Ⅳ　保管遺物・記録資料の貸し出し・掲載依頼等

西飯降Ⅱ遺跡 調査中写真・弥生土器 (絵画土器)
　平成 21 年度春季特別陳列展　展示のため　和歌山市立博物館　21.04.10 付依頼
北山三嶋遺跡 中世瓦窯　写真
　『歴史読本 2009 年８月号 古代史を書き換える 21 の新・争点』 掲載のため　新人物往来社　21.04.27 付依頼
水軒堤防 写真
　海津市歴史民俗資料館特別展『備えの考古学―文化財から学ぶ防災―』展示および展示図録掲載のため
　海津市歴史民俗資料館　21.07.11 付依頼
水軒堤防 写真、位置図
　『狭山池復活－慶長の改修に見る先端技術－』大阪府立狭山池博物館・大阪狭山市立郷土資料館共同運営記念展　展示および展示図録掲載のため　大阪府立狭山池博物館　21.08.21 付依頼
樹種同定用プレパラート 一式
　平成 21 年度夏季企画展　展示のため　和歌山県立紀伊風土記の丘　21.06.23 付依頼
北山三嶋遺跡 中世瓦窯　写真
　『中世史・考古学情報第８号』伊勢中世史研究会　掲載のため　個人　21.06.26 付依頼
華岡青洲春林軒塾遺跡発掘調査資料一式
　華岡青洲春林軒生誕 250 周年プレイベント企画展展示のため　紀の川市教育委員会　21.09.01 付依頼
西飯降Ⅱ遺跡 弥生土器 (絵画土器)、中飯降遺跡 竪穴建物の炉跡 写真、川辺遺跡出土縄文土器とドングリ 写真、野田地区遺跡紡織具 写真
　平成 21 年度特別展『衣食住の原材料を里山に求めて』展示および展示図録掲載のため　和歌山県立紀伊風土記の丘　21.09.15 付依頼
根来寺遺跡昭和 60 年ごろの現況 写真、子院調査状況 写真、柏原遺跡方形周溝墓群 写真、中飯降遺跡大型竪穴建物 写真
窪・萩原遺跡調査状況 写真
　『和歌山県教育史　第二巻　通史編Ⅱ』掲載のため　和歌山県教育委員会　22.02.23 付依頼

Ⅴ　刊行図書・出版物等

調査報告書等
［埋蔵文化財課関係］
『財団法人　和歌山県文化財センター年報　2008』　21.05.20 発行
『野田地区遺跡―高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書―』　21.10.30 発行
『百合山古墳群―県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書―』　22.01.15 発行
『西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡
　― 一般国道 24 号京奈和自動車道（紀北東道路）改築事業に伴う第１次・第２次発掘調査報告書―』　22.03.26 発行
［文化財建造物課関係］
『重要文化財旧中筋家住宅主屋ほか五棟修理工事報告書』（編著）　22.03 和歌山市より発行

報告会等資料資料

『地宝のひびき　―和歌山県内文化財調査報告会―』	21.06.28 発行（埋蔵文化財保存活用整備事業対象事業）
『紀ノ川流域の縄文文化』	21.11.07 発行（埋蔵文化財保存活用整備事業対象事業）
「重行遺跡の発掘調査成果」「キリスト教宣教師の見た紀伊国」	21.12.19 発行（埋蔵文化財保存活用整備事業対象事業）
「北山廃寺、北山三嶋遺跡発掘調査の発掘調査」	22.03.06 発行（埋蔵文化財保存活用整備事業対象事業）

発掘調査現地説明会等資料

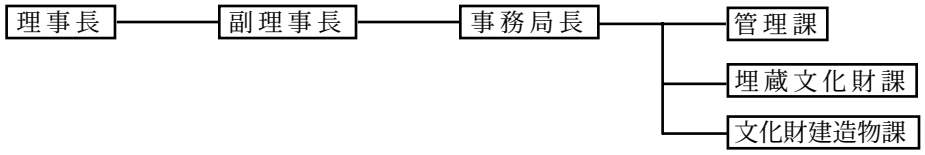
「紀州の歩み」（財）和歌山県文化財センター速報展 リーフレット	21.05.01 発行
「県指定史跡水軒堤防　現地公開資料」	21.07.03 発行
「重行遺跡　現地公開資料」	21.08.27 発行
「秋月遺跡の調査」 現地説明会資料	21.09.18 発行
「中飯降遺跡の発掘調査」 現地公開資料	21.10.08 発行
「北山廃寺、北山三嶋遺跡の調査」 現地公開資料	21.10.17 発行
「歩いて知るきのくに歴史探訪～高野山再発見～」古地図で歩く高野山文化財マップ	21.10.24 発行（埋蔵文化財保存活用整備事業対象事業）

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌　　文化財センター季刊情報誌『風車』

第 47 号　特集「北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査」	21.06.22 発行
第 48 号　特集「重行遺跡の調査」	21.09.24 発行
第 49 号　特集「秋月遺跡の発掘調査」	22.01.15 発行
第 50 号　特集「重要文化財旧中筋家住宅の修理竣工」	22.03.30 発行

Ⅵ　組織

組織図



役員 (理事)

理事長	小関　洋治	前　和歌山県教育委員会　教育長
副理事長	鈴木　嘉吉	元　奈良国立文化財研究所　所長
副理事長	山口　裕市	和歌山県教育委員会　教育長
理　事	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長
理　事	櫻井　敏雄	元　近畿大学　教授
理　事	林　　宏	社団法人　和歌山県文化財研究会　会長
理　事	前田　孝道	宗教法人　護国院 (紀三井寺）　代表役員
理　事	森　　郁夫	帝塚山大学　教授
理　事	西川　秀紀	宗教法人　東照宮　代表役員
理　事	水田　義一	和歌山大学　教授

役員 (監事)

風神　正典	税理士・風神会計事務所　代表取締役
井上　　誠	和歌山県教育庁生涯学習局長

評議員

井藤　　徹	元　日本民家集落博物館　館長
小野　成寛	宗教法人　道成寺　代表役員
加藤　容子	元　和歌山県教育委員会　教育委員
佐々木　公平	宗教法人　広八幡神社　代表役員
立花　秀浩	元　和歌山県立文書館　館長

千森　督子	和歌山信愛女子短期大学　教授
黒田　吉廣	和歌山県教育庁総務局　総務課長
辻本　　勝	和歌山県立紀伊風土記の丘　副館長
額田　誠規	和歌山県立博物館　副館長
津井　宏之	和歌山県教育庁生涯学習局　文化遺産課長
和田　晴吾	立命館大学　教授

職員

事務局長

田中　洋次

管理課

課　　長	冨加見　泰彦	
主　　査	松尾　克人	
副 主 査	出口　由香子	
嘱　　託	林　　徹郎	

埋蔵文化財課

課　　長	村田　　弘	
課長補佐	井石　好裕	
主　　任	土井　孝之	
主　　任	佐伯　和也	
主　　任	内田　好昭	（派遣元：財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
主　　任	尾藤　徳行	（派遣元：財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
主　　査	岡田　清一	（派遣元：財団法人八尾市文化財調査研究会）
主　　査	樋口　　薫	（派遣元：財団法人八尾市文化財調査研究会）
副 主 査	佐々木　宏治	
技　　師	岩井　顕彦	
技　　師	冨永　里菜	
技　　師	田中　元浩	
技　　師	村田　祐介	（派遣元：財団法人元興寺文化財研究所）
技　　師	川崎　雅史	
技　　師	手島　芙実子	
専門調査員	山野　晃司	
専門調査員	寺西　朗平	

文化財建造物課

課　　長	鳴海　祥博
主　　査	多井　忠嗣
参　　与	山本　新平
副 主 査	御船　達雄
技　　師	下津　健太朗
技　　師	結城　啓司
技術補佐員	増野　真衣
技術補佐員	田村　収子
技術補佐員	中西　順三

表紙図案

表紙右上	秋月遺跡出土　勾玉、管玉、棗玉、ガラス小玉
表紙左下	旧中筋家住宅主屋　南立面図
裏表紙	坂田遺跡出土　勾玉

財団法人
和歌山県文化財センター年報
2009

2010 年 6 月　日

【発行】
財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊 571-1
TEL 073-433-3843
FAX 073-425-4595

http://www.wabunse.or.jp/
E-mail: maizou-1@wabunse.or.jp

【印刷】